
最強無敵の魔法使いの伝説

ウ` アイス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強無敵の魔法使いの伝説

【Nコード】

N4630Y

【作者名】

ウァイス

【あらすじ】

VRという言葉をご存じだろうか？

VRとはヴァーチャル・リアリティの略であり、VRシステムのことを指す。

一昔前では確立されてなかったこの技術だが、日々発達する科学技術に限界はなく、今の現代においては当たり前前の技術の一つ。

VRMMORPG。それは少年少女の幻想。誰もが夢見たあの世界を確立させた夢の言葉。電脳空間に造られた仮想現実、ヘットギアという特殊な機械を頭に被ることで、意識を電子の世界へと誘う。剣と魔法はもちろん。人型ロボットに戦争、なんでもありの世界。彼もまたそれに魅せられた一人。

だが仮想はどこまでいっても仮想であって現実ではない。

プロローグ

その日は空が燃えてるように見えた。赤い赤い夕焼けに連動するように大地は燃え盛り、足元には瓦礫とたくさんの人間だったもの。真つ赤な水溜りの中で俺はただ一人目の前に息絶え絶えで相對している騎士を目の前にただ狂ったように笑みを向けるだけ。

「……流石としか言いようのない、な。これが日本一の力というものか」

構えた無骨な剣を息を吸うのと連動させながゆつくりと上下させる騎士。俺と違つて高い背丈に、真黒の漆黒の鎧を身に纏つた彼ですら、俺には及ばない。それは単純なレベル差からくるものでもあり、俺との実力差からくるものでもある。

本来魔法使いである俺が前衛もなしに前衛職でもある剣士の上位職の騎士なんかと相對しようものなら、確実に殺られるのは俺であつて彼ではない。完璧な後衛職である魔法使いでは騎士相手に魔法の詠唱すらしてる暇など与えてくれないとか、他にも色々と理由が上げられるが、そのどれもが俺には当てはまらない。

「しかし、まさかこの国家戦争で魔法使い一人相手を相對して負けるなんてな……。前代未聞だ」

チャキッと軽く金属音が響いた。息を完全に整えた彼が剣をしつかりと構えたのだ。数千人を軽く虐殺するように葬つた俺相手に彼はたった一人で戦うようだ。つと言っても彼の味方は誰ひとりともこの空間にいないのだからそれは至極当たり前の行為。

これは戦争だ。どちらかが殲滅されるまで終わりはしないのだから。

「構えるといい破滅の魔女よ。流石に俺一人で君を倒すことはできないが、油断しているその身……もしくは刃が通るかもしれんぞ？」

その言葉に俺はわたしさらに笑みを深くした。

ヴァーチャル・リアリティ

VRシステム。その導入と同時に現代に現れた新たなジャンルのゲーム。それがVRMMORPG。

電脳空間に確立させた仮想空間にヘッドギアという特殊な機械を頭に被ることで、意識を電子の世界へと同調させる。

今ではそのジャンルには様々なものがあるが、やはり一番人気なのはアースマジック・オンラインという単純にいうと剣と魔法の世界が確立されたゲームだ。誰だって昔は魔法が使いたい、物語の英雄のような存在になりたいと思ったことはあるはずだ。その夢を叶えるのがこのゲームである。

このゲームには大小様々な国々が10以上あり、初期設定の時にどの国の出身にするかによって始まり方が様々なパターンが用いられる。まるで一つの人生のような。

各国々の主要都市や町にはギルドという施設が設けられ、このギルドには初期設定で必ず登録さすことになっている。

冒険者ギルド、ハンターギルド、商業ギルドの三つに別れ、ギルドに関してはいつでも所属を変えられる。

キャラメイクに関してはプレイヤーに全権が得られる。ほとんどのゲームはネカマ防止など、本来の性別を変えてプレイヤーをからかう輩のために性別に関しては登録された情報を読み取ってキャラメイクの段階から、本来の性別で現れるが、このゲームが自由度が高いのか、それともまた別の理由か……。性別から身長、髪の毛、声までとありとあらゆるここまで設定が可能だ。女性キャラに関しては胸のでかさも変えられる。全国の胸の小さな女性に関しては嬉しいことだろう。

そしてこのゲーム一番の醍醐味。国家戦争……。初期設定で選択した国を起点に他の国へと戦争がしかけることができ、だが戦争を行うには同国を起点とするプレイヤーの半数以上の賛成意見が必要とされる。

真つ赤な空の下、紅い大地の上。まるで悲鳴を上げるかのように二つの金属音が鳴り響く。

「バトルメイジ………なんとやかいだな。魔法使い職であるいえの固定砲台という役目やくもくを無視して、移動砲台にさらには近接戦闘もこなす」

ギヤリイっと金属を滑らすように、俺わたしは彼の剣を受け流しながら彼

の言葉を聞く。両手に装備したガントレットはこれまでの彼の剣戟によってかなりのガタがきている。どうせ一撃も貰わないどころと安めのを買ったのが裏目に出たようだ。

「そしてその異常な魔力のステータス。本来ならさほど筋力値のないエルフだというのに俺の剣戟に対応するなどありえることではない」

一合、二合と薙ぎ払われる剣を受け流しながら彼の言動を待つ。彼はどうやら俺の秘密に気がついたようだ。

「魔力強化……その以上の魔力を使ってステータスを底上げしているというわけか」

「……フレイムボム」

ギンと高鳴る金属音と同時に小さな爆発音が響く、彼の剣が拳に触れたところで俺が発動させた火属性に連なる魔法。威力は下位魔法の中でも大きいほうだが、所詮は下位。ただ小規模な爆発を起こすだけの魔法。

だが使い方によってはその力は跳ね上がる。爆発で勢い良く弾かれた剣。引つ張られるように彼の大勢も崩れ、見事にその胴体が晒される。

「あまりべらべらと喋ることではないと思うよ？そうやって醜態を晒されなくなかったらね」

俺の言葉を鍵に世界は光に包まれた。

最後に彼が見たのは俺の背後に展開された数々の魔法陣の群れだっただろう。

夢の続き

夢を見た。それはわたしがここに来ることのきつかけの一部になった出来事。血のような紅い夕暮に真つ赤に燃え盛った大地。そこで踊った二人の夢。その一人は紛れもなくわたしだ。もう一人は誰だったか？詳しいことはもう覚えてない。

「早いな……もう一か月にもなるのか」

わたしがここに来て既に一月たった。最初こそ動揺はしたが、今に比べたらかなりましになっていくだろう。最初こそあちらの世界が恋しくて仕方なかったと言えるが、今となってはこちらのほうが愛着がわいてきたぐらいにわたしはここに馴染んでしまった。もう戻れないと言われてもわたしは気にもしないのかもしれない。

古びた小屋の扉が開かれる。そこから出てきたのは白髪の少女。ただ幼い顔立ちを残す少女が一人、ぼろぼろで苔だらけの今にも崩れてしまいそうな小屋から出てきた。

朝焼けの光をふんだんに浴び、ううつと可愛らしい声を上げながら身体を伸ばす。その光景は見るものを魅了してしまそうなほど幻想的で、だがこの周辺に人の姿はなく。なぜならここは人一人訪れ

ることが稀にしかない森の奥。

「ふあああ……」

呑気に欠伸をし、瞳から零れ出た雫を器用に指で払いのけながら少女は不意に空を見上げた。

「……嫌な感じがする。森がざわついてるってやつかな？」

少女の感覚に同意するように木々は一層ざわめき、風もない無風のこの地帯に枝を揺らした。

「……森を守るのもエルフの務めって？まあここに住まわしてもらってるのは感謝してるんだけど、はあ……。どうせあれでしょ？人間がやつかい事背負って来ただけでしょ。無視したらいいじゃん無視無視」

まるで森と語るかのように喋る少女。だが木々は答えず、ただ少女はじつと森を見つめるだけ。それだけで何かを悟ったのか少女は諦めたのようになため息を一つ吐き、煩わしそうに木々を見上げたあと森の奥へと一人脚を進めた。

朝焼けの光で銀色に輝く髪の毛からチラリと見えた耳は人のそれとは違い、尖るように伸びていた。

「ほんとエルフ使いが荒いんだから……」

愚痴愚痴と文句のような愚痴を零しながら、少女は森の奥へと消えていった。それに応えるように木々が揺れたのは一瞬のことで、少女も気づかなかった。

逃げてた。迫りくる追っ手から自らの命を守るために数々の犠牲を払ってまでもわたしは逃げた。森の中を必死に駆ける馬の身体に落ちぬよう力いっぱい抱きつきながら……。

ガサガサと草や木々の枝を掻き分けながら駆け抜ける馬に疲労の色が抜けず、今にも脚は倒れてしまいそうで、わたしは心配の色を隠せないでいる。走れど走れど森からは抜けられず、まるで森が意思を持ってわたし達の行く末を邪魔しているようにまで思えた。

だけどきつとそれはわたしの感違いなんだろう。森に意思などがあるわけがなく、ただたんにわたし達はこの深い森の中に迷い込んでしまっただけでそれ以上の意味はないのだと。

「……っ、少し休もう。あなたもわたしも疲れている、特にあなたはわたしと違って走りっぱなしなのだから」

今だ森を駆ける馬の首に優しく手を置いて撫で上げる。ただそれだけで頭のいいこの馬は意味を察したのか、走るのを止めてゆっくりと歩き始める。

「……ずいぶんと深いところまで来たな」

緑のカーテンで遮られた森の奥地。大きな木々達の枝や葉に遮られ、

光など数える程度にしか入ってこられず、日が昇ったばかりのこの時間だというのに今だ夜だと思えてしまえるほど。

「ブルルッ」

「ああ、ここで一休みしよう」

馬の鳴き声に答えるようにわたしは馬の背から降りる。ざっと土を鳴らす音が脚下から響き、わたしは大地に降り立った。ただそれだけで今まで溜めた疲労が襲ってきたのか視界を揺らすように目眩がし、眠気がわたしを襲う。

「っと、大丈夫だ……心配するな」

本当にこの馬は賢い。目眩にバランスを崩したわたしを支えるように身体をわたしに預け、今の状況を解っているかのようにわたしの眼を伺ってくるのだから。

馬の身体に支えられるように倒れた身体を持ち直し、わたしはしっかりと大地に脚を打ちつける。ここで倒れてられるような状況ではないのだ。

「と言っても、少しは睡眠をとらないとダメか……」

丸一日とは言え、ずっと馬の背の上に跨っていたのだ。走っていた馬同様とはいかないが、わたしにもかなりの疲労が溜まっている。どこかで休憩をとらなければどこかで支障をきたす恐れがあり、それが戦いの際であれば、かなり最悪になってしまう。

「わたしには生きる義務がある。死ぬわけにはいかない……」

それがわたしを助けるために囷となつていった彼らを報いられることの一つ。

生きて国に戻らねば、王女というこの身体にはそれだけの義務と価値と使命がある。たとえ土と泥と血で汚れた身体であろうとな……。

大木に身体を預けるようにもたれ、その場に座る。フカフカのベツトなどはこの際気にはしてられない。例え寝床が堅い木の幹だろうが生きてられるなら儲けものである。

腰に掛けていた無骨なロングソードを自身どうよう大木に預けるように置いてふと考える。寝ている間の見張りはどうしようかと。今現在この場にいるのはわたしと馬である一人と一匹だけで、奥深くとはいえここは森の中。どんな外敵がいるかは定かではないだろう。そんな中一人無防備で寝るなど命知らずにもほどがありすぎる。

閉じかけていた瞼を開け、起き上がるうとするわたしに馬はそれ^{たしな}を窘めるように頭をずいっと伸ばす。

「あなたが見張りをすると言つのか？」

もし馬である彼が人間の言葉を喋れるならそう答えただろうと思え

るほどに馬は優しい瞳を向けて、ブルルと一声鳴いた。

「あなたも疲れているというのに……」

肉体的疲労で言えば、一晩中走り続けだった彼のほうが大きいというのに。だが撤回する気はないというのか彼はその場から動こうとはしない。ここは彼の心気に甘えて少し眠るとしよう。森の奥地まで来たのだ、追っ手もすぐにはわたし達を見つけることはできない。起きた後に少し彼の休憩を挟んで出発するとしよう。

1

さあっーと心地よい風が頬を撫でる。風に呼応するように木々の枝が揺れ、気持ちのよい子守唄のように聞こえた。薄っすらと開けた臉から馬とじゃれあう様に遊ぶ少女がその瞳に映った。

甘えるように頭を擦り付ける彼と、それに応えるように彼の顔を撫でる少女。緑のカーテンから零れ出た木漏れ日が彼らを照らすことで、それが酷く幻想的に見えた。血のような真っ赤な瞳と白髪の少女。

（……背はわたしより少し低いぐらいだろうか？）

起きたばかりで働かない思考がそう考えだす。木漏れ日に照らされて銀色に輝く白髪を揺らし、ふと少女はこちらに視線を向けた。

所々薄く汚れた白いマントを風にはためかせながら、少女は口を動かした。

「感謝するといいよ」

ただその一言にわたしは意識を強制的に戻らされざるをえない。なぜ“子供”がこんな場所に、と。そして少女の言葉は続く。

「本当なら叩き起こしてよかったんだけど、この子がどうしてもつて言うから起きるのを待っていたんだから、さ」

「……あなたは」

「ほんと感謝してほしいね。本来なら獣たちの餌にでもしてよかったんだから」

ぱさりと顔にかかった白髪を払いのけるように手で払う少女。舞い上がった白髪とそして垣間見える少女の“耳”。それだけでわたしは理解した。理解せざるをえない。

少女が“エルフ”だということを。

「……エルフ」

「ん？あー今ので見えちゃったか。ま、でもなんでわたしがこんな場所にいるかは理解できたでしょ」

説明するのってめんどくさいんだと付け足す少女を見つめながらわたしは驚愕を隠しきれない。なぜこんな場所にエルフがいるのだと。

人里近いとは言えないこの森にエルフがいないと言い切れないものだが、それでもエルフというものは集落を作って生活するものだ。人里から離れ、森の奥地でひっそりと生活するのが彼らの習性でもあるが、別に交流していないわけではないのでエルフがいる集落がある森はしっかりとこの頭の中に叩きこんである。

だが、この森は“違う”。エルフがいるなど聞いたことなどない。

「わたしがここにるのがそれほど不思議？ 実際そうだろうね、いわばわたしはぐれエルフと言えいいのか？ 集落に身を置かず、一人ひっそりと生きている。それがわたしってわけ」

「……そんなエルフが」

「いるんだよ。実際にあなたの目の前にその一人がいるのだから」

確かにないとは言い切れなかった。少女の言うことが真実ならば実例が目の前に、わたしの前に存在しているのだから。だが、しかし……

「そのはぐれエルフとやらがわたしに何の用だ……」

起きて覚醒したての身体を起こし、すぐにも立てるように足腰に力を入れ、隣に立てかけていたロングソードへと手を伸ばす。もちろんいつでも抜けるように鞘から少し刀身を出しておく。

「んー、ぶつちやけて言うかね。森の災いの種を取り除きに來たつて言えばいいのかね？」

「災いの種？」

「そう、あなたの連れでしょう。彼ら森を破壊しながら必死に探しているみたいだけど？はつきり言って迷惑……。せつかく一人ゆつくり生活しているこの森を壊されるの。……森もわたしに助けを求めてくるし」

ジロリと睨むように視線を向けてくる少女にわたしは申し訳なくするが、正直わたしの言い分によれば仕方がないとしか言いようがない。彼女がここに住んでるのなんて知らなかったし、それにわたしは彼らに捕まるわけにもいかない。

「それで？」

「だから彼らに撤退してもらったために元凶を取り除こうかってもね」

充分だった。その言葉だけでわたしが刃を向けるのに。

「っはあ！」

飛び上がるように大地を蹴り、鞘から少し出した刀身を惜しみなく抜き放つ。一閃。少女の身体を断つように放ったその一撃は轟々と大気を断ちながらもしかし、少女の身に届くこともなかった。

「つく！？」

マントの内側から出た。細い子供のような腕。だがその腕に装備された傷だらけながらも今だ白銀の輝きを忘れることのない少女には似合わないと言わざるをえないガントレット籠手。

大きな金属音を打ち鳴らし刃は少女の手の甲で止まる。怖じけもせず、ただ少女はその刃を止めた。

「せつかちだねえー」

「……せつかちで結構だ。わたしはここで死ぬわけにはいかない、あなたを斬ってもわたしは生きてここを出る！」

例え幼き少女だろうとわたしの敵というならば斬って捨てるのみ。いや彼女はエルフだったな。その見た目通りの年齢とまではいかないのかもしれない。

ギンと刃が少女の手から弾かれ、同時にわたしは彼女ら距離をとるために軽く大地を蹴って後ろに飛ぶ。わずわらしそうに少女は顔を歪めて、一つ溜息を吐いた。

「あなたは勘違いをしてる」

「なにが間違っていると言うのだ。あなたはわたしの敵で、わたしを排除するためにこの場ににいるのだろう？」

彼女自身がそう言ったのではないか。災厄の種を取り除きに來たつと。すなわち森を破壊して周る追っ手の奴等を追い出す材料にわたしを差し出すのだろう。しかし、それはいただけない。何度も言うが、わたしは捕まるわけにはいかない。ここで追っ手に捕まれば、わたしのために命を張った彼等にどう誠意を示せばいいのだ。

「そこからまず間違ってるよ」

呆れたように溜息を吐く彼女を尻目に見ながらわたしは剣を握る手に力を入れる。今度はあの細い腕ごと叩き切る具合で、最初のよう
に油断につけ込んだ斬り捨てるような軽い一撃ではない。一撃必殺
をその身に叩き込ませてもらう。

「まず前提から。わたしはあたなを彼等に渡すつもりもないし、殺
すつもりもない」

「世迷い言を」

「わたしは最初に言ったよね？感謝するといいよって。よく考えて
みるといいよ。寝ているあなたを運ぶことだってわたしにはできた
んだし、殺すことも同様。親切丁寧に目の前で宣言するわけないで
しょう？」

「う…う…うむ…それは」

至極当たり前のことだ。だが、その言葉が畏だと確証はないわけで、
彼女がわたしを騙すために言ってる可能性もないわけではない、が。

「わかった。信じよう」

「だからねって、ええ！！？」

わたしの言葉に驚く少女。わたしを説得するために数々の言葉を用
意していたのだろうが、呆気なくわたしが彼女を信じたためにそれ
は無駄になった。

しかし侵害だ。なぜこうも驚かれねばならんのだ？確かに勘違い
して襲ったが、わたしは別に彼女を殺したいわけではない。殺さず

にすむならそうしたい。誰が好き^{この}好んで、若い少女を殺したいと思うのだ。

「……わたしが言うのもあれだけど、本当に信じるの？」

「なにを言う。そもそもあなたが言うように機会はあったはずだ。だがわたしはこうして五体満足、無事でいるわけでああなたが嘘を言ってるわけではないことが証明された」

それにエルフは潔白症だ。嘘や騙しごとは好きではない。いくら住みかのためだとはいえ、嫌なことを自らすことはないだろう。あと……。

なぜか彼女が嘘をついてるわけではないと確信できた。直感に近い考え方だが、言うだろ？ 女の勘はよく当たる。

2

「して、これからどうするのだ？」

金髪の女性が白髪の少女に問う。泥や砂で多少汚れはしているが、いまだ輝きを失わない彼女の髪はそれだけで彼女が身分の高い者なのだと伺える。

それ以外にも着ている服はところどころ血や泥で汚れているとはいえ高そうなドレスだ。そこまで派手な作りではないとはいえ、使われた生地から高級感が溢れている。

そんな彼女がなぜここに、と白髪の少女は疑問に思った。上流階級の者で、しかも乗馬に向いてないドレスでこんな森の奥深くまで。だがそれはすでにしれている。“彼”からだいたいの理由は教えてもらい。さらにそれに拍車するように追っ手という彼女を追う存在がこの森にはいるのだ。

答えはもうわかりきっていた。

「（そんな性質^{たち}じゃないんだけどね。たまには人助けもいいかな？）決まってるよ」

白髪の少女はその血のような真っ赤な赤眼を傍目かせながら良い笑顔で彼女に答えた。

「まずは森を破壊するバカたちを懲らしめないかね？」

知らず知らず。その笑顔に金髪の彼女も顔を引き攣らせ、ぎこちない返答を返すことしかできなかった。

森の大地を強靱な四つの脚が踏みしめていく。どこまでも駆けていくようなスピードでその四本の脚は進む。

大地を駆ける馬に跨りながら金髪の女性は白髪の少女とした先ほどの会話を思い出していた。

『まずは森を破壊して動き回るバカ達を外に誘導しないとね』

彼女が出てくる要因となったのは森が破壊されたことからだ。彼らを追いつきにしても森の中で戦えば、森に被害がいく。それをよしと少女がいうわけもなく、まずは追いつ手の連中を森から出すことから始まった。

『申し訳ないけどあなたには困りになってもらうよ？わたしが彼らの下へ行くよりそれが一番効率がいいもの』

確かに少女の言葉は理に適ってた。追いつ手はこの馬に跨って森を駆ける女性を追いつこの森に辿りついた。そして彼女を追いつ詰めるかのように森を破壊して、今も尚この森の中を進んでいる。白髪の少女が彼らの前に出たところで、彼らがそれを追いつけないわけではないが、一に大事なものは彼女（白髪の少女）ではなく、一彼女（金髪の女性）なのだ。

『安全を保障するとはいかないけど、最短ルートでの森の出口は教える』

そう言われて今なわけだが、森への出口は今だ教わっていない。ど

うやって誘導するつもりなのかのは彼女の定かではないが白髪の少女は自身をもつてそう言ったのだ。信じるしかないのだろう。

「……見えてきたな」

白髪の少女が言った通り。彼女は少女が示した方向にこれまで迷いなく馬を走らせていた。森の中間地点。少し開けた広場のような大人数での休憩や野営には最適な空間。そこに追っ手はいた。

「ここからだな。……ミスは許されない」

一度彼らの前に姿を現して充分に煽ってから、着かず離れずの距離を保って逃げなければいけない。今自分は弱っているのだとアピールすることも忘れてはいけない。弱った獲物を追い詰めない狩人はいないのだから。

「だが皮肉なことだ」

狩人は彼らではなく。白髪の少女と金髪の女性だということに今だ気付かない。彼らはまず知らないのだから。

1

野営のためのテントが数個に、見張りが4人。捕獲対象である帝国王女の身柄を追う内に彼らはこの森の中へと迷い込んだ。近くにある町や村からもよく知られていないこの森だが、王女を逃すわけも

行かず、彼らはここまで追っ手来た。この森に帝国王女がいることは確かで、馬の蹄の跡もこの森へと続いていた。だが一向に見つかる気配がないこの状況に煮えを切らし、この森のどこかに潜んでいるだろう王女を炙りだすために森を破壊しだしたのはつい数刻前のことだ。

この任務に失敗は許されず、失敗はすなわち死をどころかたちまちそれ以上に厄介なものを運んでくる。それは戦争という災害だ。

人が起こす最悪な災害。

ピクリと見張りの一人が反応した。だんだんと近付く蹄の音に気がついたのだ。そして彼にも彼女にもその姿がお互いに見えた。

響く怒声。同時に一人の女性と一匹の馬が広場に脚を踏み入れる。

キンッと軽い金属音を鳴らして、女性は腰に差したロングソードを抜き、彼らを見据えた。

2

ここからが本番だった。白髪の少女は緊張したその身を震わせながら彼らを見ていた。その瞳に映るは一人の金髪の女性とそれを囲むようにいる男たち。どれも軽装だが立派な剣を腰に掲げ、薄くも分厚くもないプレートアーマをその身に纏わせている。

鎧の肩部分には少女も知る一つの紋章。剣の鞘にもその紋章は刻まれている。二匹の蛇が絡まるように螺旋を描くその紋章。まさしく三大国家が一つ魔国を示す紋章。彼らは魔国に属する騎士なのは一目瞭然だった。

「……これって一国に喧嘩を売つてると変わらないかな？」

握った手のひらからは手汗が滴る。それだけでこの少女がどれだけ緊張しているのかがわかるだろう。だが相手が国と言ったところで少女の選択肢は変わらない。後悔したとこで遅いのだ。彼らが魔国だということはすでに知れていた。それでも少女は彼女を助けるといふ選択肢を選んだ。

「……わかつてる。そんな性質たちじゃないことなんて」

少しぐらい夢を見たっていいでしょと誰にでも話すわけでもなく少女はただそう呟いた。

3

「まさかあなた側から来ていただけとは思いませんでしたよりリ
アス帝国王女」

金髪の女性。リリアスを囲む中、一人彼女に語りかける青年。彼はこの部隊の隊長であり、リリアスの護衛達を数多く葬った一人。今だ二十を少し超えた年齢で一つの部隊を預かるところから、彼は優秀な部類なのだろう。

「何を言っているのか知らんがわたしは貴様らに捕まりに来たわけではないぞ」

「ほう？しかしこの状況からどう逃げるといいますか。すでに退路は断たれ、あとは僕の号令一つであなたは無様に呆気なく捕まるだけですよ？」

「面白いことを言うな貴様。貴様達は今だ誰の相手をしているかわかってないようだ？わたしは帝国王女……王の中で唯一武王と呼ばれた彼の娘だ！」

リリアスから真つ赤なオーラが立ち上る。身体を伝い、剣を伝い、その炎のような赤のオーラは近付くもの許さぬように彼女の周りを囲む。

「たかが一介の騎士ごときに後れをとるわたしではないのだよ！」

ドンとまるで爆発したかのように足音が響き、今まで脚を止めていたリリアスを乗せる馬が動く。急なその動きに誰も反応することができず、馬は騎士達の間を上手く擦り抜けて駆けていった。

「……また逃げるのですか。なにか策があるのかもしれませんがたかが一介の王女ごときに破れる騎士ではないのですね。狩らせてもらいますよその身……多少傷を付けても問題はないと上からは言われているんですよっ！」

夢の続き2

森がざわめく、木々の枝と草を掻き分けながら複数の馬が駆ける。時々先頭の馬に跨る金髪の女性目掛けて、矢や火の玉が撃ち放たれるがそのどれもが彼女は意も解さず己が剣で打ち払っていく。

風に揺れる木の葉が彼女を手助けするように道を示し、彼女リリアスはただそれに従って馬を走らす。

「……これがエルフの力か？」

森と供に生を分かち、暮らす彼らだからこそできる芸当と言ってもいいそれは神秘的で一種の感動を覚えさせられる。だが今それに感動している暇などなく、リリアスは背後から迫る矢じりに剣を振った。

「つく、なんとも言えんな。道案内してもらえるのは嬉しい限りだが、これではいつか追いつかれてしまう……」

だがリリアスが馬の“手綱”を握る必要がないのはかなりのアドバンテージとなる。馬である彼は人間のように利口だ。どうすればこの状況を生き抜けるのが理解しているようだ。だが、それももしかしたらあの白髪のエルフの少女のおかげかも知れない。

ただ自身が彼から落ちない程度に手綱を握り、リリアスは背後から迫る矢や、魔術を斬り払う。走ることや、方向には既に彼にまかせつきりで、だがそのおかげでリリアスは背後に注意を向けることが可能になった。

馬だって生き物だ。ただ跨るだけでは走らない。しかるべきことを教え、調教してやっと人を乗して走れる。乗せた走ったとしても人の命令がなければ馬はただ愚直に直進するだけで終わる。この逃亡戦では命令をせずに走らせることはリリアスにとっては多大なアドバンテージだ。

前を向かずに後ろだけに注意を向けられる。追っ手の全員は背後。前ではない。逃げ切るのならただ愚直に直進するだけでもいいが、ここは森の中。森の地形とは平地と比べて雑だ。木々がその行く先を邪魔し、草や枝に隠れて踏みしめる大地の確認が雑になる。

「お前達なにをしてるんだ！相手は女一人。なぜすぐに仕留められないんだ！！？」

「しかし隊長！この足場の悪さではちゃんとした狙いも定められませんし、それに届いたとしても全部斬り払われます！！」

今だ仕留められないリリアスに痺れを切らしたこの部隊の隊長である青年が声を張り上げる。その瞳の中に映るは焦りの色。このままリリアスを森から逃がせば、捕獲のチャンスを逃す可能性が高くなり彼らの立場が危うくなる。

「くそ、くそつ！なぜ王女はこの足場が悪い中後ろに注意を向けられる！！」

叫びたい衝動を抑えながらこれまでのことを思い出す青年。この森に逃げるまでは王女の馬術は良いとも言えないただ乗って走らせるだけというお世辞にも上手いとは言えない程度だったはずだったが今この状況を見ればどうだ。まるで長年つき添ってきたでもないような馬との信頼関係も設立し、走ることをすべて馬にまかせつ

きりである。

「……なぜだ、なぜ!？」

今はつかず離れずの状態だがこのままではいづれ距離を開けられ、逃げ切られる。

「逃がしてたまるものかつ!僕たちの命が掛かってるんだ!!魔術兵、広域殲滅魔術を使い!森は燃やしても構わない。王女の足を止めろ!」

それはあまり勧められることではなかった。森に火を放つというのだ。森の外なら言わずもがな、彼らも中にいる。つまり彼らにも火の手は襲いかかるのだ。だがそれだけ彼らも切羽詰まっているというわけでもある。失敗すればない命。それが彼らに拍車をかける。

「っ!まさか森に火を撃つというのか!？」

先頭を突っ切るなか、大音量の走る足音が聞こえるなかりリアスにも聞こえた高らかに歌うように魔術を詠唱する声。大量の火の属性のマナを周囲からかき集める様子をその目で見た彼女は即座に理解をせざるをえなかった。リリアスも火の属性を得意とするもの。体内に吸収するマナを見てそれは先ほどからリリアス目掛けて放たれる火の魔術と規模が違つと。

「いけない……それはダメだ!死にたいのかお前達!？」

「もとより覚悟の上で僕達はあなたを捕えに来た。失敗すれば死ぬ命……だがそうそう死んではられないこの身っ!博打というものもたまにはいいものだ!僕は思ってるよ!」

覚悟を決めたという青年の瞳。それはもうどんなことを言われたって揺るがない。だがリリアスは森を焼くという“行為”にその身を焦らせていた。

「これ以上森を破壊されれば……」

いったいあの少女はどうするのだろうか。エルフのその身ならわかるはずだ、この場に充満する大量の火のマナ。それがどういう使い方がされるのかも。

危険だ。危険すぎたその行為。リリアスは森が焼かれ始めた後のことを想像してその顔を青く染め上げる。

「ははははっ！もうなにを言ったところで止まらないよ王女様っ！
」

森がざわめく。ただ風にその身を揺らしているだけのように見えるがリリアスにはそう見えない。まるで静かだった森が怒り始めるように見え、そして詠唱を終えた魔術兵たちが左右に、リリアスを超えて追い越すように炎の津波を放った。

森が焼けていく。彼女を追っていた騎士達の魔術兵達が火を放った

せいで。まだ森を荒らして破壊するのは許せた。木が倒され、破壊されようがいつかまた芽が根づくから。だが炎は違う。

焼けていく森を茫然と見上げるように白髪の少女はいた。その森の中にいた。焼けて悲鳴を上げ続ける森の声をその身に聞きながら少女はいた。焼け落ちる木々、灰にかえる草。メキメキと悲惨な音を上げて倒れ、燃えてゆく森。

「……一か月だ」

たった一か月この森に住んでいた少女。まだなにもわからず生まれての赤子をあやすかのように受け入れてくれたこの森。だがそんな短い期間だったとしてもこの森は少女の親のような存在だった。正直エルフという存在だったからというところもあったのだろうが、それでもこの森は少女と供に生きることを良しとしてくれた、時に口うるさく、だが優しくまるで本当の親のように少女と一緒に暮らした。

「……そう、だよな……。なんでこんなこと考え付かなかったんだろ」

自身の愚かさを改めて教えられてしまった。彼ら騎士達が森に火を放たないわけがなかった。追い詰めるためになんでもするってなんで気付かなかったのだろうか？自身の愚かな行動のせいで少女は“二人目”といえる親を失うのだ。

「あーあ……バカだな俺は、こんなことなら初めっからめんどくさ
がらずにみんな殺してしまえばよかったんだ……。虐殺は俺の得意
分野だっていうのに」

壊すことしかできない少女にこの森を助ける手段はもたず、それにここまで火が燃え広がったこの森を助けることは誰にでもできないだろう。

ふと少女は頭によぎった金髪の女性のことを考えた。

（あの人は無事にでられたのかな？）

きつとまだだろう。こんな火の手が燃え広がるなか、やすやすとその前には進めまい。ただ直進するだけで出られる道を示したがこれではまともに進むことも難しいはず。そこまで考えて少女は茫然とさしていた己が肉体を動かした。

「せつかく人が善意で助けようとしたんだから、その辺で死なれてたら寝覚めが悪いかな……？」

1

「ブルルルッ」

炎に行く手を阻まれ、さすがに彼も止まらざるをえなかったのかも。しれない。彼から降り、わたしはこの炎の元凶となった彼らと対峙する。

「ほんと……やってくれるっ」

「捕えられないにせよあなたを失うことは帝国にとっても痛手のはず。ならば僕たちはせめてこの命をかけてあなたを殺させてもらうだけだ」

わたしを追って来た彼らも全員馬から降り、すでに抜き身の刃をその手に持っている。これはもしかしたら絶対絶命というやつだろうか？お父様はこういう状況をなんとか垣間見たと言っていたが、どうやってその状況を潜り抜けたかは教えてくれなかった。

今さらかもしれないが聞き出しておくべきだったのかもしれない。

「そこまでして戦争に勝ちたいか？！」

「我が王を勝たせるためになら僕はどんな手段だって使う。例えば奴に踊らされていようとね。……お喋りはここまでだよ王女様。大丈夫もし運がよかったのなら手足のどちらかがなくなるかもしれないけど、生きてられるかもしれないよ」

悔やむ暇もなく、騎士達は迫る。

しかし、森を燃やしたのは本当に間違いだったかもしれない、失策も失策だ。

「集え集え集え」

「詠唱？だけど遅い」

そんな青年の声が遠くから聞こえたが、遅いのはどちらだっただろうか。

「わが身を包め、その欲深き業火の炎で」

左右から迫る二人の騎士による斬り払い。迷いもなくわたしの首目掛けてくる刃にわたしは怖じけもせず、ただ

「わたしは地獄で身を焦がす罪人となろう」

その手に握った刃をはしらせた。

轟つと身を包む紫炎。迫る剣を溶かし、リリアスは剣を振り払い、まるで虫を払うかのように二人のその首を刎ねた。

「っな……」

我が目を疑う様に驚く青年。落ちた二つの“なにか”。まるで湧き出る泉のように降り注ぐ雨のようにその赤をそこら中に散らばせた。だが彼女の身体は赤に染まらない。降り注ぐ紅い雨の中を平然としながら剣を振るったその体制を維持しながらリリアスは動かぬ塊になった二人の騎士を見る。

「わたしを追い詰めるためとはゆえ、火を放ったのが悪かったな」

その身に纏う紫炎はリリアスに降り注ぐ紅い雨を蒸発させ、まるで鎧のように彼女を全てから護る。大量の火のmanaを犠牲に使われたその魔術は地獄から罪人を焼く炎を呼び出し、使役する魔術。水など言わずもがな、鉄だろうと人だろうと近付くものは全て燃やしつくす業火。

「本来この術は限られた場所でしか使えないという扱いどころが悪いモノなのだが……、貴様達のおかげだ」

限られた場所とは火山など火のmanaが大量にその場に存在する大地。五体属性を連なる火のmanaは何もせずともその場に在るものだが、それでもこのリリアスが使う術に足りない。使おうにも火のmanaが尽きて発動すらないものである。だが今この場は火山ほどとは言わないが大量の火のmanaが在る。きっかけは魔術の火とはいえ、一度火がつけばそれは自然そのものとなる。火のmanaというものは炎とともに存在する。

大規模な森火事を起こせば、本来満ち足りぬmanaも足りるということだ。

「しかしやってくれる……この森を燃やすとは」

「それがなにかあなたに困ることもあるのかい？ 聞いてみればこの状況は王女、あなたにとって望んでもいられない状況だと僕は思うのだけだね」

皮肉のような青年の言いざまに、リリアスはピクリと片眉を動かすが、反応はそれだけでそれ以上は何も言わない。もう語るも遅いというわけだ。

「確かに厄介な魔術だ。さすが武王唯一の娘といったところだね？
だけどさあ、総勢二十五人……おっと二十三人か。僕達騎士団に一人で勝てるとは思わないことだよ」

一介の英雄と同等扱いされている武王ただ一人の娘であるリリアス。だがリリアスは武王ではない。もしこの場にいるのがリリアスではなく武王ならば彼らは一瞬でモノ言わぬ肉塊にくかいになっただろうが、対峙するはリリアスである。武王に鍛えられたその身とはいえ彼女は十九歳の女性だ。たった一人しかないその身、数の暴力相手ではどうにもならない時がある。

「……リリアス・ノル・ヘウゼ・アンデバーク。一人ではない。我が身にはいつだって彼らが傍にいるから……推して参らせてもらう……！」

「名乗り上げかい？王女が一介の騎士のまねごとを、ね……。プロア・リンベル。名乗らないわけにはいかないのが騎士というものの性さがかな？」

リリアスの名乗りに例え騎士ではないにせよ、その心遣いを感じた青年プロアだからこそ自身も名乗り上げた。まるで今から一対一の決闘をするかのように見えたが残念ながらそうはならない。

プロアが名乗りを上げたところで他の騎士たちは動き出していたのだから。

轟とまるで悲鳴を上げるかのように紫炎が渦を巻く。その中心にはリリアス。上空から迫った蛇のようにうねる水の奔流から身を守るために紫炎を動かしたのだ。ジウウッと焼き石に水をかけたかのよう
に奔流は蒸発していき、それにより起きた水煙がリリアスを隠す。

「水はダメだ！他の魔術を使えっ！！」

叫ぶフロアの声が聞こえる。火に対して水を使うのは一種のセオリ
ーのように思える。だがこの紫炎に対して水ではいささか役不足だ
っただけ。フロアに叫ばれた魔術兵たちもそう感じたのか周囲から
その身に集わされるマナに水のマナは見当たらない。

ざつと大地を蹴る音がリリアスの後ろから聞こえた。悠々とその状
況をリリアスに見ている機会はなく、ギラギラと光る鋼の刃がその
身を危険に晒す。リリアスの背を一閃するかのような斬りあげ。

「無駄だっ！」

前ばかりを注視していたため一瞬リリアスの顔にひやっとした汗が
流れたが、紫炎を背後に回すことで事なきことを得た。振られた剣
は業火に焼かれ、その身を焦がして形を崩す。それに最早斬るとい
う機能はなく、リリアスに迫った騎士の一人は呆気なくその身を紫
炎に焼かれてこの世を去る。

「……まったく数というものは厄介だなっ」

味わってからこそ身にしみる体験談というものだろうか。それは他
人に言われただけでは本当に理解することは難しい。だが一度味わ

えば理解できるというわけである。

ばかりと閃光が疾^{はし}った。詠唱を終えた魔術師による雷^{いかすち}の魔術だ。音速すら容易く超える雷に例え紫炎でさえ防ぐ術を知らない。その速さに燃やしつくすことができないためだ。

穿つ雷撃の槍を身体を屈ませ、避けるが続いて一撃、二撃と止まることを知らないようだ。

「つく、近付くことさえまならぬというわけかっ!？」

続けて放たれる雷撃の槍を避けながらリリアスは悪態をつく。だが魔術兵が雷撃の槍を乱発するために騎士はリリアス同様近付くことができないためにお互い様と呼べるが、それでも動かされるリリアスからしたらジワジワと体力を削られていく。

「我が言葉にしたがえ大地よ!」

一人の魔術兵が高らかに詠唱を始める。その言葉の意味と、彼に集まるマナからしてそれは今だ雷撃の槍を撃ち続ける雷^{いかすち}の魔術ではなく

「その重き身体^{みたい}を操り、我が宿敵を捕えよ!」

大地を操る地の魔術だと。

うねりあがる大地。雷撃を避けるリリアスにとってこれほど厄介な魔術はない。意思をもったかのように動く森の大地はリリアスの足下から形を作り、リリアスの足を捕えた。

「っ火に雷に地まで使うのか!?!多種多様すぎるのも困ったものだ

な！！」

リリアスは火属性特化型であるために火属性の魔術以外使えない。それに比べてブローアの部隊にいる魔術師たちは多種多様の魔術をこなす。紫炎は確かに強い魔術と言えるが、だがそれでも魔術の使いようでは弱い魔術でも打ち負かされる。雷撃の魔術がいい例だ。その速さにより燃やしつくすことさえ不可能なために、どんな威力の弱い魔術だろうが防ぐことすらできない。リリアスが形を持たない炎である紫炎ではなく形のある地の魔術を使えてたのならば苦戦なともしなかっただろう。

そもそも火の魔術は攻撃性に優れすぎているせいか、防御という観点に対しては著しく弱い。圧倒的な攻撃力もそのためにあると言って違いないと思われるほどに火の魔術は防衛には向かないのだ。

「捕^とったっ！」

大地に囚われたリリアスを見、ブローアが勝利を確信した。彼女がその身に纏わせる紫炎で大地を焼き崩すより、ブローア側の陣営にいる魔術師が放つ雷撃の魔術が彼女を撃ち貫くほうが早いと。

だがここでブローアは一つの間違いを起こしたのだろう。

「殺すな、生かせっ」

ブローアにとって、いや彼が所属している魔国にとってはリリアスという帝国王女が生きて魔国に囚われるのと、ここで殺して帰るのであればだいぶ観点が変わってくる。もちろんそれは政治的材料としての話なのだが。

ブロアの声に反応した魔術師が威力を落とした雷撃を今だ大地に囚われたリリアスに向けて放つ。当たれば死にはしないが気絶する程度のショックと、軽度の火傷は負うだろう雷撃。紫炎に焼かれて、ボロボロと今にも崩れそうになった大地の手。だがさすがと言えるのか、そう容易くと壊れてくれない。

「ここまでということかつ……」

武王と呼ばれたリリアスの父ならばこの状況だろうと容易く突破するのだろう。そして意図も簡単に見出すのだろう。そういうことばかりがリリアスの頭の中に考えられていく。

（所詮わたしはわたしか……、お父様ではないとはわかっているのだがどうにも悲観してしまうのだな）

武王の期待に添えられて育ったリリアスだからこそ彼女は父に憧れ、父のようになりたいと思っていた。だが結果はどうだ。父とは違い自分はもう負けの一手手前。こう考えてる間にも雷撃はリリアスを貫くのだ。

「紫炎を使つてまで負けたのを知つたらお父様は怒るだろうな……」

もう雷光はリリアスの目の前まで迫っていた。反射的に紫炎で雷撃を止めようと炎を伸ばすが、雷は止まらない。燃ゆる紫色の地獄の業火を貫き、その矛先はリリアスへと叩きこまれた。

ブロアは二つ、己が行動を間違えた。一つは言わずもがな森を焼いたこと。そして二つ目は。

雷撃の影響で今だ立ち上がる土煙りでリリアスは姿が見えなくとも、それが晴ればリリアスがその場に意識をなくして倒れている姿があるだけなのだ。と確信をもつて言えた。一時の勝利の余韻、それを噛みしめる様にブローアは大声で叫んだのだ。

[illegible]

「は は は は は は は つ」

「ははははははっ、はああ?!」

40

風が吹く。土煙りを払う様にこれ以上隠すこともないと言わんばかりに風がそれを剥いでゆく。

「危機一髪ってやつ？」

そこにはリリアスを庇うように立った白髪の少女が一人。ニヤリとまるで嘲笑うかのように微笑みながらそこにいた。

驚愕していたのはブロアだけではなかった。白髪の少女が目の前に。自身の前にいることがリリアスにとっては信じられなかった。だかこそ彼女はその姿をまるで幻のように感じていたのだが。

「……うん、怪我もないし大丈夫」

くるとブロア達騎士をまるで気にもせず背を向けてリリアスの安否を気にする彼女をどうして幻影と捉えれようか。

剣を大地に刺し、膝を立てるリリアスを心配する一彼女（白髪の少女）に申し訳なくなってしまう。それもそうだ。リリアスは止めることができなかった。少女の住処であるこの森を燃やしてしまったのはなにもブロア達、彼らだけの責^{せき}ではない。止められなかった自身と、この森に逃げ込んだ全ての元凶である自分が悪いのだと考

えしまう。

「……わたしは」

すぐにでも謝罪の言葉をその口から紡ごとりとリリアスはするが不意に少女の人差し指が彼女の口にあてられた。

「今は野暮なこと言うときじゃないよ？それはこれが終わった後にもね」

ぱちりと可愛らしく片目を閉じた少女。その真っ赤な瞳に見据えられ、リリアスは黙り込んでしまふ。

「いつまでそうしてるつもり？」

痺れを切らしたかのようにフロアが告げた。本来なら背を向けてあるうが斬って捨てるべきなのだろうが、それをしなかったのは彼女が少女のような容姿をしていたためか、それとも騎士道精神に反するためか、それともどちらもなのか。定かではないがフロアには躊躇われたようだ。

「しかしいったい君は何者だい。こんな危ない森の中に何か用事でもあつたのかな？」

「そうだね……用事と言えば用事だね。それもとびつきり大事な用事だね」

向き直り、フロアと対面する少女。その白髪と血のような紅い瞳を持った容姿の少女を警戒しながら相對する。なぜと言われればフロアはこう答える。あの雷撃を防いだのはこの少女以外いたい誰が

いるのだと。それに加えてこんな今だ燃える森の中にいるのだ。警戒しないわけがないと言える。

「せっかく親切心が出て助けようとしたのに、死なれたら寝覚めが悪いじゃん？それに……」

ポツリと少女は言葉を漏らす。

「この森を焼いたあなた達にはきつついお仕置きをしてやらないと気が済まないってのもあるね」

「……なるほど王女を手引きしたのは君というわけか。おかしいと思つたよ。逃げていた彼女が急に攻勢に出るなんて自分が有利な状況に陥らない限りありえないわけだからさ」

「手引きって言っても親切丁寧に道を教えてあげただけなんだけど――」

それがなにか問題でもあるのかと白髪の少女は言いたげだがブローアにとつては大問題だ。そのせいで彼らはここまでの窮地までにおとしめられたのだ。問題も問題も大問題と言っても過言ではなさ過ぎた。ゆえに。

「例え君が純情無垢な少女だとしても、僕らの邪魔をしたと言うのなら斬って捨てられたとしても文句はないよね」

騎士として今だ幼さが抜けていないこの少女を斬るのは少し抵抗があったとしても、任務の邪魔をするのなら別だ、とブローアは少女に伝えたかった。ブローアとて本望ではないとしてもこれはもう戦争問題にまで発展する事柄。冷戦が続くこの状況の殻を破ればこのよう

な少女を斬る機会がないわけでもなくなるのだから。

「わたしを斬る？……ずいぶんと面白いことを言っただねお兄さん」
くすくすと笑う少女。その容姿ながらまるで小悪魔のようで、そして確かにこの少女は彼らにとってまるで悪魔なのである。それを一番に理解していたのはリアス以外この場にいなかっただろう。少女の正体を知る彼女以外それは知ることもない。

「斬れるものなら斬ってみるといいよ。油断したこの身、もしかした届くかもしれないね」

それは運命だったのかもしれない。少女は今日夢を見ていたのだから。状況は違うが、今と同じように油断していたこの身を見事斬ってみせたただ一人のあの騎士と同じ騎士である彼らなら、と。もしかしたらその刃は通るのかもしれないと。

「……殺^やれ」

冷たく、小さな低いブローの声が森に響いた。パチパチと今だ木々が燃えゆく森の中を。

夢の続き3

轟々と森が燃える。焼け落ちた木々が周りを囲む。まるで最後の力を使った森の意思がここにいる者達を逃がさぬよう閉じ込める結果のように。炎が囲む。

最初に動いたのは誰か。白髪の少女はブロアの言葉に意にも返さず、うなる炎の光に照らされながらただその場を動きはしなかった。抜き身の剣をその手に持った五人の騎士が少女を逃がさないように既に囲んでいた。

「つくそ！逃げるんだ。例えあなたがエルフと言えどこの状況はまずい！」

すでに囲まれていたことにリリアスは気付けてもいなかった。だからこそリリアスは少女の安否を心配し、毒を吐きながらも言うのだ。

「……くすつ」

だというのにこの白髪の少女は彼女の言葉すら意にも返さない。ただ、玩具おもちゃを前にした子供のように笑みを浮かべるだけ。いったいなにが少女をそうさせるのか。

「斬れっ！」

ブロアの怒声のような指示に一齐に動き出す騎士達。動いた騎士達に触発されたようにリリアスも動こうと脚を動かすが。

「っあかふっ……！？」

不意に伸びてきた少女の足蹴りに反応する暇もなく、鳩尾を的確に蹴りぬかれて痛み悶絶してしまう。

「邪魔はさせないからね」

不貞腐れたように言う少女の声がこの森でのリリアスにとっての最後の記憶だった。

1

リリアス
彼女は気絶させた。少し痛かったかもしれないけど雷撃でマヒした身体を無茶に動かされてもわたしが心配になるだけだし、あんまり動きまわられて助けられなくなるのも困る。そう考えたら気絶って結構上等な手段だったとわたしは自覚してるつもりだ。

「つと、…」

後ろから首筋に振られた剣をガントレットで滑らす。ギャリイツと気味の悪い音を呻き上げる剣とガントレット。倒れたリリアスを退かす猶予も相手側はくれないようで、次々に剣がわたし目掛けて振られていく。

横薙ぎ、斬り払い、袈裟切り。どれもわたしには掠りもしない。戦場で踊るように回転しながら、ただ振られる剣に合わせて腕をすらせるだけ。たけかましい金属音で煩いが、気にもしていたら斬られ

て終わりだ。

「こいつっ！」

「なにやってる！」

「奇妙な動きしてんじゃねえっ！」

どう剣を振ろうがいくら振ったところで剣は掠りもしない。そもそもがわたしに接近戦で勝つ？お笑い草だなそれは。

「寝てなよおじさんたち」

剣を踊るように避けながら、順番にそれぞれの鳩尾を的確に貫いていく。がつんと拳の進行を胸当てが邪魔をしていたが、衝撃だけをそこに沈めるのも悪くはない手段だと思っている。私的^{してき}にはそちらのほうが痛いし、痛みも残る。

「雑魚^{雑魚}には興味ないんだ」

やるなら大将。できるだけ早く討ちとれば指揮の統一性もなくなつて、騎士たちもただのチンピラと変わらない。

「まっさきに僕を狙うか……。戦いに対しての心意気はしってるみたいだね」

だけど甘いと言う彼の^{プロア}声が小さくわたしの耳に聞こえた。聞こえるように発した言葉ではないのだろうが、変に高い身体スペックのあるこの身体には充分に聞こえたみたいだ。

彼の後ろから感じ取れるマナの気配。それだけで彼がいったことを理解はできたが、どれもこれも彼らはわたしを舐めているのだろうか？集わせるマナも感じさせる魔力も小さすぎる。危機感が小さすぎるのも困ったものだとなたしは思う。

「貫け雷光！」

「燃やしつくせ煉獄！」

「捕えよ大地」

歩みを止めるように大地から湧き出る炎。それはあつという間にわたしを囲み、わたしを動けなくしその間に大地がわたしの足を捕える。

「連携は見事なんだけどね……」

使う相手が間違っていることには気づかないのだろうか。それでは剣が無理なら魔術つという気持ちもわからないことではないが、わたしほどの魔術師に対して初級、中級程度の術で足止めなど。

「そんなことされたこともなかったよ」

異世界トリップって君達は信じると思う？よく小説や、御伽話の中

にあるように、ある日突然知らない世界に召喚される。俺は信じる、信じないで聞かれたらまず間違いないと信じるに答える。というか俺には答えざるをえないってのが本音だけだね。

本当なら俺も皆のようにそれは信じられないと答えたいというところだと言っただが、そう言えない事情が俺にはあった。あの日、あの瞬間を期に俺はこの不思議ファンタジーな世界に来てしまったのだから。信じる、信じないという話どころじゃないというわけである。

物語のように勇者になって魔王を倒すためでもなく、腐敗した世界を救世主のように救うためでもなく。ただ召喚された俺にはなにか意味があったのか。

そんなこと誰にもわかるわけがない。

白髪の少女が舞う。幼い容姿に似合わないガントレットを装備したその両腕を振り回しながら踊る。その顔に最早先ほどの笑みの表情も消され、ただつまらなそうに、ただ無表情に騎士を殴り倒す。すでにプロアの頼みの綱であった魔術兵たちは物言わぬ塊になって存在し、騎士たちは必死に生にしがみつように剣を振るっていた。

「こんなことが……」

ありえるというのだろうか。しかしその言葉はブロアの口からは紡がれない。完璧だった。そのはずだった。現にあの時魔術を放った三人の魔術師たちもそう思っていたに違いない。だけどそれは知ることができない。できるはずがない。死人に口はなし。彼ら三人はもう動くこともできない。

「くそっ！」

ブロアは今だ健在する白髪の少女に視線を向けた。残った総勢で殺しにかかっているというのに少女は今だ傷の一つすらできてない。ダンスでも踊るかのようにヒラヒラと剣を避け、時たま大振りをした騎士の剣を大きく弾いて、その身に拳を打ち込む。

全員が倒れるのも時間の問題だった。

1

正面から頭から振り下ろす大振りな剣の軌道にただ手の甲を優しく打ちつけるだけ。それだけで手の甲の宿した魔法陣から小規模な爆発が起き、力のない少女でも爆発の力を利用して剣を弾ける。

（もう一カ月が経つんだけど今だ全快とはいかないからね。極力は魔力消費を避けないと）

身体を強化する魔力強化は力のない少女に多大な力を与えるが、^{みたい}今だ“未完成”のそれは使う度の魔力消費が激しく、今の少女にとっ

ては非常に燃費の悪いものになりさがっている。

（あーあ。戦闘はもつと楽にこなしたいんだけどなー）

今の戦い方は本来の少女の戦い方と違って、従来のやり方であるなら彼らは骨の一つすら残らずに消し済みにされているであろう。少女は魔術師だ。接近戦を得意とはするがそれは少女が一番得意とするやり方ではない。もう一度言う少女は魔術師なのだ。

チマチマと殴って敵を倒す魔術師がどこにいるというのだ。魔術師とあるならばもつと派手であるべきだ。破滅の魔女や虐殺王と言われた少女ならではの戦闘方法……それは。

「集え、轟雷。（やっぱり魔力に気を使って戦うつてのはわたしには似合わないよねー）」

横に難いだ剣を屈んで避ける。続いて後ろからくる斬り払いに屈みながら逆立ちをするように片足で相手の顎を蹴って倒す。

「貫け稲津」

少女の独奏は止まらない。止めようと躍起になるほど仲間の数が減っていく様を見るフロアにとって見れば、まるでそれは滑稽な道化師のようで。

半ば逆立ち状態の少女の胸を狙った突きが、腕の力でその身体を反転することで流され、中を回る少女の足が突きを放った騎士の後頭部に踵を打ち込む。うめき声を上げながら倒れ込む騎士の小さな頭を足場に少女は空へと舞い上がった。

「今こそ裁きの時である」

展開された一つの魔法陣。それは少女の遙か真上に、神が人に裁きの雷を落とすように。空を塗りつぶすように。

「我は破滅の申し子。破滅の魔女。虐殺王。その名の下に従え神の雷」

りと鈴が鳴るような音が聞こえた。だげどそれは勘違いで鈴が鳴っているのではなく魔法陣から音は聞こえていた。りんりんりんとけたましく、まるで臨界点を機械のように。

「広……範囲殲滅……魔術だ、と？」

誰かがそんな声を漏らした。

2

正直言えばブロアは逃げたくて溜まらなかった。この任務も最初からその気ではなかったのだ。彼は自らの君主である王を戦争に勝たせてやりたいという純粋な気持ちを“奴に”利用されてこの任務についてしまった。ブロアは勝たせたかったのだ異種族統一の夢を持つ魔国国王の夢を叶えるためにも。例えそれがどんな手段になろうと、騎士道に反しよう。

だが彼は

「嘘だろ……」

後悔していた。全てに置いて後悔していた。気持ちを利用されたことも、この任務についたことも、王女を攫おうとしたことも、全てに置いて後悔した。きつと全てがなかったらこんな化け物にも出会わなくて済んだかもしれないのだから。

3

雷光が森に降り注いだ。燃える森に追い打ちをかけながら降り注ぐ雷光はさらに森の火に発破をかけ、激しく燃やしていく。それに気にもせず少女は雷光を放ち続けた。

下を向けば雷に焼かれた無残な騎士の姿がいくつか。けどそこにブロアの姿はない。焼け落ちる森の中を移動しているのだろうか。仲間を置いて？捕獲対象だった彼女も置いて？だがそう言われても少女は納得する。

（わたしと正面きつて戦うバカであつちでもあんまりいなかったしねー）

やはり彼らをあの騎士と同じように見たのが間違いだっただろう。力の差を思い知って逃げたところで少女から逃げきれぬわけもないのだから。

不意に。

「隙だらけだ」

空中に浮かぶ少女に向けて剣戟の音が聞こえた。中ですれ違ちゅうう彼の顔に最早余裕という言葉はなく。仲間を失って悲しむわけもなく。ただ後悔しながら、そして生きようと必死にもがく人の姿があっただけ。

少女の顔に笑みが戻ったのは彼の表情を見たのと同時といていい。何がそんなに愉快なのか、なにがそんなに面白いのか。彼にそれフロアがわかるわけもなく。ただ空中で笑う化け物に目を見据えるだけ。

そして。

「痛いな……」

肩に滴る赤に向けて指を滑らす少女は痛みなど感じないかのように斬り裂かれた肩を大事に触るように、ただ壊すかのように握りしめる。

「参ったな。油断しすぎたねこれは……」

間違いなどではなかった。ただその思考が少女の頭を埋め尽くす。あの時の“黒い騎士”とはまた違ったがフロアは見事に少女に一太刀を入れた。思ったよりも傷が深いのかそこから湧き出る血はまるで止まることを知らないかのように少女の手と身体を真っ赤に染め上げてく。

“スイッチ”が切り替わる感触がこれまた格別で少女の頭には喜の感情しか浮かばない。

「俺^{わたし}も本気をださないかね」

指についた赤をその舌で舐めとりながら少女はその歪んだ笑顔で言う。

対するブロアは怯えた表情で、だが生きる決意をしたその表情で歪んだ笑みを作る少女を睨む。その手には鞘に戻された剣を握りながら。少女がどう動こうが、走れるように腰を落としながら。

今だ中^{ちゅう}に浮かぶ少女はさっきまでへらへらと笑っていた口を閉じ、大地で構えるブロアを見据えた。彼はいつ、どうやって少女が動くかと反応ができるような体制で待ちに入ってる。少女が動けば、当然ブロアも動き、距離をとりながら戦う参段^{さんだん}なのだろう。彼にはもう真っ当に戦うつもりなどは微塵も残っちゃいなかった。ただ生き残れる可能性があるやり方を彼なりのやり方で導き出した。

「……戦いに置いて臆病者ほど厄介のものは無いってね。誰が言っただかな？」

少女はまさしくその通りだと思ってしまった。後手に回るというものがこれほど厄介だった戦^{いくさ}いがあっただろうか？ いや、ない。先手がこれほどやりにくいと思ったのも初めてだ。これは少女にとっては初めて尽くしである。

「……治療^{ヒール}」

動く前にまずはブローに斬られた部分の治療。放っておけばその内失血死になるであろうほどの血を今だ流し続ける傷口を癒し、血を止める。ただたんに血を止めたにすぎないので長時間の戦闘はできないかもしれない。短期決戦。この戦いが現実であることがこれほどリアルに感じることもできるのも、“それ”のおかげかもしれないと不意に少女は思ってしまった。

“あちら”なら血を流しこそすれば、だが傷口さえ治してしまえばそれ以降から死に直面することなどなかった。ただゆえにあそこが現実ではなく仮想^{仮想}ならではのだろう。

だからこそ興奮する。

（今、俺^{わたし}は死の直面に瀕している。これが本当の戦い^{いっしあ}。これが本物の戦闘）

油断すれば次の瞬間に自分の首が飛んでいく世界。それこそが少女の求めていた世界でもあった。つまらない日常？少女にとっては犬に喰わして糞にしまいたいぐらい退屈だ。

そう。少女は刺激^{スリル}を求めている。

「っ、はああ！」

細い腕を乱暴に振り回す。掌の先には少女の掌と同等に展開された魔法陣。そこから出るは雷撃。暴風のように大地を薙ぎ払うがすでにその場にブローはいなく、彼は後ろに距離をとるところか前に突

き進んでいた。

「だったらっ」

残った片方の腕をフロアに狙い定め、今度は薙ぎ払うようにはなく縦に振り上げる。そこからは先ほどと同等の雷撃。鞭のように撓りながら少女目掛けて走るフロアに喰らいつかんと迫った。だがそれも虚しく空を断つ。驚異的な脚力だと少女は舌を打った。急な方向転換と言ってもいいようなほどにフロアはバックステップで一氣に真後ろへ飛んで避けたのだ。

「魔術は驚異だ。だけど歳はもいかないうちに殺されてあげるくらいに僕は優しくない」

フロアにとって詠唱のない少女の魔術は普通の魔術に比べてそれなりの脅威といってもいい。だが彼には今まで培ってきた戦場の経験と実力がある。当たれば即死に近い少女の魔術ちいえど、無詠唱でノーリアクションで発生させられようが、そのスピードは遅いといっても過言ではない。魔術の中で一二の速度を誇る雷で^{いかずち}あろうが、操るのは少女。じっくりと観察して動けば避けられない道理はない。

伊達に騎士団の隊長は努めてはいなかった。

「言ってくれる！」

量の掌に展開された魔法陣を握りつぶしながら少女は言った。まさか格下と思っていたフロアにここまでコケにされるとは思いもしかつただろう。今だ剣も抜かず彼は余裕の表れなのだろうか、回避行動に専念するだけ。

「俺の十八番は近接なんだけどー?!」

膝を曲げ、少女は中を蹴った。

「魔術師が格闘家の真似ごとをするものではないだろう?」

ジグザクに飛び交いながら少女はブローとの距離を詰め、小さな掌を握り拳を作る。振り上げた拳はブローの背後から迫り、だが。

「隊長格を舐めてもらったら困るんだよ、これが!」

「あはっ」

ギインと金属音の余韻を残して少女の拳はブローの剣に阻まれた。嬉しそうに声を上げる少女とは対照的にブローは動揺していた。握った剣が震えていた。少女を斬ることに恐れたわけでもなく、それは剣にかかる負荷から。

「その小さな身体からは考えられない力だねまったく!」

「っと、まだまだあ!」

弾き、斬り返して距離をとろうとするが少女がそれを許すこともなく。剣を後方に身体を倒すことで避け、また拳を繰り出す。

「本当に子供かいっ!?!」

先ほどから剣を前にして怖じけもしない少女にそう思ってしまうブローは悪くなかっただろう。確かにこの世界には歳はもいかない子供たちが戦場にでたりすることもある、剣や魔術を教える学校だ

つてある。だけど実際に実戦を目の前にして臆せずに行動できる人物はそうそういない。

後退しながら剣を振るうブローだが、少女は離れもしない。そのまま密着状態を維持し、剣を掻い潜りながら拳と脚を器用に使って戦っている。

「うーん。やるねえー、ここまで俺のラッシュに耐えられる人はそれほど多くないんだけどなー」

前に進みながら戦うのと下がりながら戦うのでは圧倒的に体力の消費のしかたが違う。確かに迫る攻撃は危機的だが、避ければおのずと反撃の機会がやってくるのだ。しかし下がりながらでは違う。ただゆえに追い詰められてるのだ。そう感じてしまふ。焦りも出、攻撃が単調にもなるし、後ろにも気を使わなければならない。ゆえに少女の拳戟を凌ぐブローの実力が高いことが解ってしまふ。

「まっ。でもこれならどう？」

横薙ぎされた剣を避けるのと同時に少女はバク転。後ろに下がりバク転して中を舞う少女の両手には魔法陣。

同時に放たれた雷撃の鞭。それは左右からブローに迫り、まさしく雷の壁となってブローを押しつぶさんとする。飛べば狙い撃ち。前に進んでもそこには少女。どちらも鬼門である。

「舐めないでもらいたいねっ」

魔術は使えないがそれでもブローは騎士団の隊長格。そこには当然普通の騎士だけではなく魔術兵もいるわけで、魔術対策を怠っていない

ないわけがない。剣を鞘に戻したブローアは左右の内、左から迫る雷撃へとその身を走らせた。

走りながら抜刀はっとうの構えをとりもう目の前まで迫った雷撃をしっかりとその目に留めた。バチバチと空気を帯電させながら迫る雷撃に恐怖しながらもブローアは歩みを止めない。目の前に雷撃が迫ったことで剣を握る手に汗が滴る。滑り落ちないようしっかりと握りなおしながら彼は剣を勢いよく解き放った。

「なっ……！？」

少女はその光景に驚き眼を丸くするほどであった。本来なら剣ごとブローアを焼きつくすだろう雷撃がただの剣に、魔術も使えないブローアの手によって断ち切られた。ニヤリとしてやったりと言わんばかりにブローアは少女へと笑みを浮かべる。

「驚いてる場合じゃないよね！」

雷撃を斬り裂いて抜けたブローアは力強く地を踏みしめて止まる。勢いのつた身体はすぐには止まらなかったが、引きずった爪後を残しながらブローアは動きを止める。そこから急激な方向転換。逆方向からは同じように雷撃が迫ってはいるが、それは最早驚異とは言えない。すでにブローアは確証を得てしまったのだから。

「そんな致命的な隙を僕が見逃すと思うなよ！」

「……まさか魔術を斬ってしまうなんて……思いもしなかったよ。」

「後悔は僕に斬られた後にするんだな」

すでにブローは少女の傍まで来ていた。あとは呆けた顔をした少女を切り捨てるのみになっていた。

「見事としか言いようがないね。まさか魔術を斬られるなんて思いもしなかったよ」

「僕も上手くいくとは思わなかったけどね。確証はなかったわけじゃない」

魔術はどんな形をとったとしても所詮は魔力の塊でしかない。この世に生きる全ての生物に少なからず魔力というものが宿ってはいる。それを使えるようになるかは人次第であり、ゆえに魔術を使う者はただたんに魔力を操り、それを使えるようにしたにすぎない。

「魔術こそは使えないけど、魔力を扱う練習は彼らから教わっていたよ」

ブローの部隊にいた三人の魔術師たちのことだった。すでに少女に殺され、二度と動かない身とはなったが、彼らは素敵な置き土産をブローに置いてくれたのだ。

「剣に極薄状に纏われた魔力が雷撃を断ったてわけか……」

「知ったところでもう遅いよもう君は僕の間合いの中。魔術を撃とうが僕に断たれ、近接格闘だけでは決定打が君には打ち込むことができない」

どれだけ腕を動かそうが少女の軟な腕ではブローには適わないとしてもブローは言いたいのだろう。確かに的はえているが、それでこの少女が諦めるわけもない。

「なるほどなるほど……。勉強になったよ、ありがと。だからね？」
言い知れぬ悪寒とでも言ったらいいのだろうか？ブローアの身体を襲う寒気と恐怖。気がついた時には剣を握っていた腕が勝手に動き、少女を斬ろうとしていた。間違っではなかったと思う。それは動物が持つ本能に従ったものだったから。野生から離れ、薄れた人間に残った残り少ない本能から導き出された答えに身体が従ったのだから。

「お兄さんもう用済みだよ」

“それ”はなんだったのだろう。少女の背中から出てきた真黒な腕。とでもいえばよかったのだろうか？人間とはまた違った筋肉質な腕だった。尖るような三本の指を持ち、その爪にかかればなんでも引き裂けるような鋭さを兼ね備えてもいた。

音もなく、ただ元からそこにあったように出た腕が振り下ろされたブローアの剣を容易く受け止め、刃は少しその肉にめり込みはしたものの逆に腕の筋肉に挟まれて抜けなくなってしまふ。

「……あ」

言葉が出なかった。それほどブローアにとってそれはおぞましく見えていたのだろう。その少女も、その腕も。

「つつがぁ！？」

振り払うように振るわれた腕に剣を握っていたブローアは巻き込まれ、剣は抜けないがその勢いに負けたブローアはついにと握った剣から手

を離してしまった。燃える森の中に投げ込まれ、焼け落ちてない大木の一つに背を打ちつける。

痛みに肺にあった酸素を吐き出し、ゴホゴホと咳を吐きながらブローアは広場の中央に立つ少女を見る。

「化け…物だと…思っではいたけど、まさか本当に…人じゃないだなんてね……」

まるで苦虫を潰したかのような表情で少女を見つめるブローア。そこにもう希望はなく。あるのは絶望だけだろう。

「そうだ！あなたには楽しませてもらったお礼をしないとね？」

まるで遊びに付き合ってもらった子供のように無邪気な笑顔をブローアに向けながら言う少女。もうすでにその背中にあった黒い腕は消えていたが、今だブローアには在るように見えてしまう。

「お礼といつてもただ俺の名前を教えてあげるだけだけど…死ぬ前にはちゃんと自分を殺した人の名前を知っておきたいものじゃない？」

ブローアに問いかけるように少女は言うが今のブローアにそれに答える気力はない。たった一撃、だがそれでも十分に堪えてしまった。

「エレノディア。遥か四百年前にだけど、この名を聞いて怖じけなかった相手は少ないと思うのだけど？」

「なるほど……僕は最初から無駄な戦いに手を出していたというわけか……」

エレノディア。世界万国にこの名を知らないという者はいないであろう。その名は遙か四百年前に恐れられ、魔王と呼ばれていた数人の一人の名前。

「伝承どうりだとすると君はハイエルフか。見た目というものには騙されてはいけないものだね」

森を滑る童^{わらわ}。虐殺者。破滅の魔女。数多い字^{あざな}で国々を滅ぼして回った魔術師。字の中に童とあるようにその容姿から幼さが滲み出ていることは知られてはいたが、まさかまさに子供のような姿をしているとは誰も思っまい。一人で国に攻め入り、一騎当千の如く人々を蹴散らして、殺し。その魔術の力量の大きさから魔術の王。魔王とまで人々に恐れられた一人。

「おおつ。よく知ってるね？もうずいぶんと経ってるのに」

パチパチと両手を打ち鳴らしながら拍手をし、喜ぶようにいう少女エレノディア。

「俺^{わたし}もずいぶんと有名になったものだね……。まさか数百年たった今でも語り継がれてるなんて思いもしなかったな」

感激するように、だが照れるエレノディアはそれだけを見れば容姿どうりの子供のようだが、その本性を知ったブロアからしてみればおぞましいかぎり。

「褒美をとらせようじゃないか。……なんてね」

可愛く舌を出しながら茶目っ気を見せつけるが、少女の背から展開

されたものにブローアは目を見張る。エレノディアの背から空を覆うように展開された幾千の魔法陣。数は数えるだけ無駄な気がするよ
うな膨大な数の魔法陣。

「最後に見るといいよ。俺^{わたし}が魔女と言われた由縁を、ね」

そう告げてエレノディアは身体を翻し、倒れていたリリアスを片手で持ち上げてその場から離れていった。

1

去ったエレノディアの姿が見えなくなるまでブローアはその場を動くことはなかった。もう一步も動く気力なんて残ってもいなかった。普通なら痛みも無視して逃げまどうのだろうがブローアにはその気力が最早なかったのだ。

「まさか今頃になって魔王の一人が動くなんてね」

四百年前からその活動が目撃されなくなっていた魔王の一人が動き始めたのだ。どういった理由でこの森に現れたのかはブローアに知る術はない。だがこれは国家問題にもあたいる事柄。だがもうブローアにはこのことを自らの剣を捧げた主君である王に伝えることもできない。

「戦争なんてしてる場合じゃなくなるっていうのに……。悔しいな。僕はあのお方に勝利を捧げると誓ったんだけどな」

もう森の炎は辺りを完全な火の海に変えて、あとはこの場にいるブ
ロアを燃やすだけになっていた。このままいけばエレノディアの置
いた魔術が発動する前にブロアは火に焼かれて生き絶えるだろう。
だが

「炎に焼かれて死ぬことすら君は許さないというわけか……」

遙か大空に展開された空一面すら覆う魔法陣の数々。バチバチと帯
電し、今にも雷を落とさんとしておりブロアは魔法陣の帯電よって
光り輝く空を眺めるだけになる。

「心残りがあるとすれば……」

頭に残るはあの方の笑顔だった。

「魔王のことを我が王に伝えられないことだな」

千の雷。破滅の魔女が得意とした一つの大規模広域殲滅魔術。それ
が森ごとブロアを薙ぎ払った。

夢の続き 4

揺れる身体に気付いて目が覚めた。

「ここは……」

そこは馬の背中の上だった。器用に意識がないというのにわたしは馬の背中に乗っていたようで、起きたわたしに気付いた馬が脚の歩みを止める。

「わたしは……」

意識が落ちる前のことを思い出す。そこは焼け付く森の中だったはず、いかにしてわたしはこんな草原のまっただ中にいるのだろうか？ わたしを庇ったあの白髪の少女は？ わからないことだらけで頭が痛くなってしまう。

「お前は何か知っているか？」

馬である彼に聞いたところでなにも答えが返ってこないのはわかりきったことなのだろうが、誰かに問わねば落ち着かないのもまた事実。身体についた少しの煤^{すす}がわたしがあの場にいたことの証明であり、あれは夢などではなく真実であることも。

「わたしは生かされたのだろうか……？」

あの白髪のエルフの少女を犠牲にして。

「……っ」

やりきれない。いったい何人犠牲を出してわたしは生きるというのだ。人を犠牲にしてまでしか生きれないのだったらわたしは死んでしまったほうがマシではないのか？そんな葛藤が頭の中を駆け巡る。考えてはいけないことだとわかっていても、わたしは人を犠牲にしてまでも生かされるほど有益な人間なのかと。

ただ帝国王女なこの身。そこまで大事なのだろうか？

「そこまでにしといたら？あまり自分を卑屈してる性格が螺子曲がつちゃうよ」

不意に後ろから聞こえた声。聞き覚えのある声だった。そうあの森の中でわたしを救った恩人の声。幼い容姿をしたあの白髪エルフの少女の声。

「よつと……、丁度いいね。休憩しよつか？」

わたしが振り返ると同時に少女は馬から飛び降り、馬の顔を撫でながらわたしに笑顔を向ける。その顔にはわたし同様煤がすす付いていて、だがそれがいっそう少女を可愛らしくさせていた。

2

「ねえリア？」

「なんだエレノディア？」

わたしがそう言うのと白髪エルフの少女エレノディアは不貞腐れたように頬を膨らます。怒りを象徴させているのだろうが、いかんせんそれは見てるだけで可愛くて癒されるだけだとなぜ気付かないのだろうか？

「エディって呼んでって言ったじゃん……。わたしはリリアスのことリアって呼んでるのに」

ぶー、ぶーと文句を言いながらエレノディアはそう言うが、わたしはなんとも……。実際エディと呼んでもいいのだが……。なんというかずっと王宮に暮らしていた弊害とでも言うのだろうか。わたしに友と呼べる者は一人もいなかった。わたしの周りには護衛の騎士たちしかいなかったし、それも主従という関係で友と呼べるものではない。これがかれもお父様がわたしを王宮に縛ったせいだろう。過保護なお父様はわたしに学園へ行くことも許してはくれなかったからな。

自国にある学園ならともかく行かしてくれてもよかっただろうに。まああれだ……。愛称で呼ぶというのはわたしにはいささか恥ずかしいのだ。慣れん……。

「まあいいよ……。リアがエディって呼んでくれるの根気強く待ってるから」

わたしの心内を察したのかしらないがエレノディアはにぱつと笑う。まるで光り輝くようなその笑顔にわたしは申し訳なくなつて顔を背けたくなるような衝動に駆られるが、そこは我慢しよう。あきらかに悪いのはわたしなのだから。

「さて、お互いの自己紹介も終わったことだしー。これからどうする？わたしは住む場所なくなっちゃったし、リアは早く家に帰らないと親が心配するんじゃない？」

「……そうだな。早急に帰らねばお父様がなにをするかわかったものじゃない、がその前にエレノディア。あなたの事を第一に考えなくては」

「なんで？」

疑問に首を傾げるエレノディア。確かにわたしは早急に帰らねばいけないだろう。今頃王宮では連絡のこないわたしたちを心配してお父様が動き出そうとするころ合いだ。必死にお父様を宰相殿が縛りつけてくれているだろうが、そこはご愁傷様としかわたしには言いようがない。

「エレノディアはわたしの命の恩人だ。そんなあなたを置いて自らを優先させるなどわたしのプライドが許さない」

「別にいいのに。リアはリアでやらなければならないことがたくさんあるんでしょ？だったらそれを優先するべきだよ。わたしは二次」

「そうはいかないと言っただろエレノディア」

「わたしは気にしないから大丈夫。それにわたしは恩返しがしてもらいたくてリアを助けたわけでもないし、最初はリアを殺そうとしたよ？」

「……助けてもらったのは事実だ。それに恩を報いたいというのはわたしの勝手だということもわかっている。だからわたしの勝手でエレノディアに恩返しをするのも間違っではないと思うが?」

わたしの言い分にむうつうねるエレノディアを見ると彼女がわたし同様頑固だということがわかってくる。新しい発見だ。可愛いだけがエレノディアの取り柄ではないのだな。

うねりながらひとしきり考えたのだろう。ぱつと顔を明るくさせてエレノディアは言った。

「とりあえずはこのこと保留にしようか」

「保留とな?」

「うん保留。ひとまずはリアの身体の傷も癒さないといけないし、このことは近くの町か村についてから考えよ?」

「うつむ……まあそうだな。エレノディアに恩を返すと言っても今のわたしにはどうにもできないからな……」

彼女に新しく住処を与えようにも町や村の家を与えてここで彼女がそれを良しとするかもわからないとこだ。エルフは森に住処とするかな。お金でどうにかできる問題でもない。そもそも命を助けてもらったのに対して金でどうにかするのも気が引ける。

まずはどこかゆつくりと休める場所に行って、王宮に連絡をとってそれから……。

「ならば休憩してる場合などではないな。さあ早く出発するぞエレ

「ノディアっ！」

「もう、せっかちなねーリアは」

そう言っても反対しないのがエレノディアの良いところなのだわたしは思う。離れて休憩していた馬を呼び寄せ、わたしは彼に跨る。

「あんまり走るとリアの身体に響くだろうから歩いていこっか？リアは彼に乗ってゆっくりしててね」

「わたしは早く行きたいのだが……まあしょうがないか。そういえばエレノディア。なぜわたしは意識を失っていたのだろうか？彼らの雷撃の魔術もエレノディアが防いでくれたから少しの身体の麻痺だけですんでいたはずだったはずなのだが？」

「え？！えっとそれはね……」

「それになぜか腹部のそれも鳩尾あたりがかなり痛むな」

「えーと、なんでかなー？！わたしシラナイヨ！気づいたらリアったら気絶してたんだもの！」

落ち着かない彼女を見るのもまた楽しいなと思うわたしだった。

「着いたねー」

「ああ着いた。しかし……」

もう空は日が落ちて夕暮れどころか、暗闇へと変わっていた。街の城壁に付けられた門はしっかりと閉じられ、街に入ることすらできない。魔物が徘徊するこの世界ならではの夜は街ではしっかりと門を閉じられ、見張りの兵以外は門のそばに近付けないことになっている。

城壁に付けられた松明が周囲を明るく照らし、門の真下にいるわたしたちを照らす。

「……どうしようかエレノディア？」

時間にしてはもう深夜。日が暮れてかなりの時間が経った今に街を訪問する者などいないと高を括ったのか門番の衛兵たちの姿も見えず、せつかくここまで来たというのに時間を無駄にするだけに終わってしまった。

「うーん。ねえリア。さすがに街に入れる場所がこんなバカでかい門だけってわけじゃないんでしょ？」

「まあそうだな。緊急時に出入りできるようにと、あと見張りようの門が隣には付けられていたと思うが……」

「じゃあそこから入れないの？」

「難しいな……。今のわたしたちはどちらとも身分を証明できるものを持っていないからな」

「リアの剣は？」

エレノディアにそう聞かれるがわたしとしては困ったことになった。確かに王女であるわたしの剣には王家の紋章が描かれているが……エレノディアにわたしの正体が知られるのは嫌だ。もうわたしが着ている服でいたい身分が高いであろうことはバレているのだろうがさすがのエレノディアもわたしが王女だと思わないだろう。かなり私情だが知られて距離を置かれたその日にはわたしはショックで立ち直れそうにない。なにせ初めての友だからな。

それに

「こんな格好で見せても信じて貰えるかどうかだな……」

一番の要因はそれがでかい。視察でたまに外へでかけることはあっても、それでもわたしの姿を知る者は少ない。基本的にわたしは王宮に引きこもって剣を振っているからな。王宮の者ならいざしらず、こんな王都から離れた街にわたしを知る者など皆無に等しいだろう。

「困ったねー。今さら戻って野宿なんてしたくないよわたし？」

「それはわたしも同感だ。しかし、このままだとそうなりそうだな」

いやいやーと叫ぶエレノディアを尻目にわたしは考える。こうなったら一か八かで衛兵に問いかけてみるかと。どうにか上手く話しをでっち上げれば入れるかもしれない。一応傷だらけとはいえ、それなりの格好はしているのだ。多少の不信感を与えることになっても入れてもらえる可能性はないわけではないだろう。

「むー、リアー。めんどくさいからこの門ぶっ壊していい？」

「さすがのエレノディアでもそれは難しいと思うが？この門は魔術を軽減する魔吸石が使われているから、多少の魔術じゃビクともしない」

「じゃあどうするのさー……」

落ち込んだ顔でわたしに問うエレノディアにわたしは困った顔しかできなかった。

1

「お前ら何をしている？」

それは少女たちにとっての救いに違わなかった。

白髪の少女が言う我が儘に困った顔をしたような金髪の少女。その喧噪に寝ていたところを起こされた彼は門の前に突っ立つ彼女たちがなにをしているのが気になった。もう誰もが眠りに付くこんな夜遅くに街の門の前で何用なのかと。

「む、衛兵か。いないと思ったのだが……その顔を見るからには眠っていたのか」

なぜか傷だらけのドレスを着た金髪の少女が彼を見てそう言う。軽装の胸当てとないよりはマシだと思い持っていた剣を腰に掲げた彼はその少女の恰好に不信感を覚えた。

「ラッキー。ねえねえこれで街に入れるんじゃないリア？」

「……そうだな。起きたところですかまないが衛兵殿。わたしたちを街の中に入れてくれないだろうか？」

「二三質問はいいか？」

片や傷だらけのドレスを着た金髪の少女。服に使われた素材から見るに位が高いのだろうが、片や汚れた白いマントを羽織った旅人のような白髪の少女。どう見ても組み合わせが可笑しすぎた。衛兵である彼の不信感を改めて覚えさせるほどに。

「まずこの街に来た理由は？」

まだ来てないのだがあと数日もいかないうちにこの街には帝国王女がやってくる。この街のすぐ近くにある国の視察に行くためにこの街を経由するのだ。そんな大事な時期に来たこの少女二人は怪しさを通りすぎてもはや笑えてくる。

「……少し言いにくいのだが野党に襲われてな。わたしの護衛もすべてやられて一人逃げ切ったはいいが、困っていたところをこの子に助けられたのだ」

「……なるほど」

金髪の少女の言い分は間違っていないのだろう。所々傷の入った服

がそれを語っている。貴族が持つ鎧や剣などいったものはその見た目の派手さからしてかなりの高さで売れるのだから。

「ではあんたは？」

男は金髪の少女から視線を変え、白髪の少女へと問いかける。だがそこで気付いた。

「瞳が……紅い？」

門の横に付けられた観門所からは暗くてよく見えなかったのだが、こうして松明に照らされた下で見れば白髪の少女の瞳は血のように真っ赤だった。

「わたし？わたしはね。旅をこよなく愛する旅人っ！」

まるでごっこ遊びをしているかのように喜々しく言う少女は全然旅人などには見えなかった。

「できれば連絡用魔境などはないだろうか？帰ってこないわたしを心配してる家族に連絡したいのにな」

「この街にそんな高くて立派な物は置いてねえよ……。昔っからの伝書鳩しかないが？」

男がそう言うのと金髪の少女は困ったような表情になり、理解していないのか白髪の少女は首を傾げるだけ。

「まあいい。あんたたち怪しいが別にこの街に不利益はもたらさんだろ……。通ることを許可しよう」

「なんだかわかんないけどラッキー？」

「そうだなエレディア」

そうして少女たちは街の中に入るのだった。

2

この街ディダはすぐ隣に帝国一の商業国家が隣にあることから商業に関してはそれなりの有名さを持っている街だ。誰もが寝静まるような深夜の時間だろうが仕事を終えた商人やらが酒場に集まって今日の利益などを話し合い、次の商売先などの話などで盛り上がっている。

何が言いたいのかというと、こんな深夜だろうが街の明かりは絶えず付いており、街の中には目元に隈を作った商人たちが行きかっている。もちろん酒場の主人や、商人たち以外はほとんど寝静まっている。

そこには宿の主人も入ってるようで。

「閉まってるねリア」

「ああ、閉まってるなエレノディア」

なんとか街の中に入れたというのに二人は宿に泊まれずいた。

「考えはついてたのだが……宿が閉まってるなどとは」

「そうだね。わかりきっていたことだよね」

いくら宿屋の住人だろうがこんな深夜に起きているわけもなく、泊まっている客も含めて全員眠りについてる。

「どうする？」

「ああどうしようか……」

まさか街に入ったにもかかわらず野宿するはめになるとは思いもしなかった。だがそれだけは何としても避けたい二人は宿屋は諦めて、他を当てることにした。

「うーんそうだリア。酒場に行ってみない？」

「酒場？なぜだ」

「同時に宿も経営してるところもあるんじゃないかなーって思ったの」

エレノディアが言うことももっともだった。夜遅くまで働く商人たちの娯楽のために用意された酒場が多いこの街ならないこともないのかもしれないとリリアスは思った。

「そうだな。だったら酒場を探すでしょう」

どうしてこうなったのだろうか。そう考えてリリアスは頭を悩ませていた。

「うっわ〜お酒強いんだねおじさん」

「おうよっ！そういう嬢ちゃんもなかなかやるじゃねかつ！」

がはがはと意気揚々に笑う筋肉質な男。その片手には泡立ったエールが注がれており、荒々しい顎鬚を片手で擦りながら男は隣で同じくエールを飲む白髪の少女に言っていた。

「あの男はエレノディアが年下に見えてるのだろうか、自分よりも遙かに年上としたらどう思っただろうか……」

はつきり言っただけのエルフの見た目というものは信じてはいけない。どんなに幼かろうがそれで数百歳といったエルフがいるのだ。エレノディアもその類なのだろうとリリアスは思っていた。今では子供のような喋り方をしているが、最初にあつた時なんかではそんな喋り方ではなかったのではないかと思わず突っ込みたくなる。

「おいおいその嬢ちゃんも湿気た面してないで一緒に飲まねえか

っ?!」

「飲まねえかゝ!」

二人して笑いながら絡んでくるこの男と少女をリリアスはどうしたらいいか悩んでいた。エールの入ったジョッキをお互い打ち鳴らしながら、迫ってくる二人に呆れた視線を向けることしかできない。

宿は見つけた。見つかったのはいいが、まさかこんなことになるとは思ひもなかった。

「すまないな」

「いや、氣遣ってくれるだけで有難い……」

隣に座る同じ思いを共有する男に同情の笑みをもらいながらリリアスは改めてため息を吐いた。

「あなたの連れはいつもこうなのか？」

二人から視線を外し隣に視線を向ける。そこには人のよさそうな笑みを浮かべる男が一人。その男の片手にもエールが入ったジョッキがあるが、連れである筋肉質の大男と違って酔ってはいないようだ。白い長そでのシャツと青いベストにネクタイ。黒のズボンを履いた彼はやれやれとでも言いたそうにしながら、大男に一瞬だけ視線を移し、すぐにリリアスへと戻す。

「いつもは違うな。今日は対等に飲み比べできる相手が隣にいてテンションが上がってるのだろうな。しかも子供とはいえ、美少女だからな」

「まったく男というものは……。いや女もそうは言えんか」

大男と一緒に隣で騒ぐエレノディアを視界に捉えながらリリアスはそう呟く。

「……………ゆっくりと休めと言ったのはどこの誰だか……………」

そう言ってリリアスはまたため息を吐いた。その視界にエールを飲みながらはしゃぐ少女と大男を入れながら。

夢の続き5

二日酔い特有の頭痛と吐き気に襲われながらわたしは起きた。

「……………気持ち悪い……………」

所々寝癖で刎ねた髪を整えることも忘れてわたしは気付けばそう呟く。今にも胃の中のを戻しそうな衝動にかられ、隣のベットですやすやと眠るリアが恨めしく思ってしまうほどにわたしはこの初めての二日酔いに戸惑っていた。

「お酒なんて……………」

飲むんじゃなかった。今さらそう思いはしてもそれは後の始末だろう。そう後悔しながらわたしは部屋を出るのであった。

1

「おっ、昨日の嬢ちゃんじゃねえか？ん、はは、んその顔から見るに二日酔いつてか？」

酒場兼宿も兼ねてるこの店は一階は酒場となっており、二階は商人や旅の者の宿として作られてる。部屋から出てすぐの階段を下りればそこには昨日見慣れた一人の大男が一人。片手にエールが注がれたジョッキを持って騒いでいた。

「うげえ……。朝からお酒なんて見せないでください」

「そう言わずに。昨日の嬢ちゃんの飲みっぷりは素晴らしかったぜ！また飲もうぜっ」

わたしとしてはこんな症状に陥った今を考えるともう当分は酒を控えたくなってきている。目の前にいる大男を見て尚更そう思っつまうの悪くないはず。

「こらこら。二日酔いで苦しんでる奴に酒を進めるバカがどこにいる……」

「おうよっ！ここににいるぜ！」

がはがはと笑って答える大男に困ったような、呆れたような顔で言っても無駄だと悟ったのか大男の影に隠れていた一人の男性が開店準備をしているだろう酒場のマスターに代わって、カウンターから水の入ったグラスを持ってきた。

「ほら。これ飲みなよ？少しはマシになると思うから」

この人は確かわたしがあの大男と一緒に飲み比べをしていた時にリアの隣にいた人だと、酒のせいで曖昧となっている昨日の記憶を思い出しながら、わたしはグラスを受け取った。

「昨日はバルが迷惑をかけたね？相棒として謝罪するよ」

「んゝ誰が迷惑をかけたって相棒よ。昨日はそこの嬢ちゃんも楽しんでたんだから無礼講だろっ！」

今だかはがはと豪快に笑う大男に肩を組まれ、それでも尚大男に相棒と呼ばれた男性は申し訳なさそうにして、だがこれ以上言うのも無駄だとわかつているのかそれ以上なにも言うことはなかった。

「まあ確かに昨日はわたしも楽しんでたしねー……、自業自得つてやつ？だから謝る必要はないよお兄さん」

グラスに入った水を飲みほしてからわたしは彼にそう答える。以外と水も美味しいものだなっと思ってしまった。ガンガンと何か打ちつけるように酷く痛かった頭痛もそこそこ治まり、吐き気もマシになってきた。水も侮れないものだ。

「だろっ！つてことで嬢ちゃん。昨日の続きしねえか？！」

いったいどこから出したのだろうか？すでに両手には並々とエールが注がれたジョッキがあり、片方はわたしに向けられて差し出されてる。

「それは……勘弁かな？」

わたしは苦笑いを大男と男性に向けるだけだった。

起きたら部屋はもぬけの殻だった。酒に酔い潰れたエレノディアを寝かしつけたのはすでに朝日が昇り始めたころだったのは覚えてる。だからわたしがこんな昼過ぎまで寝ていたのも納得はいくが、酔い潰れていたはずのエレノディアがわたしより早く起きていたことに、多少なりの苛立ちを覚えた。

わたしの命を救ってくれたのは確かだ。わたしの身体の安否を心配してくれたのも彼女だ。それは確かに覚えてる。だが少し彼女は自由奔放過ぎないか？早く身体を休めようと言ったのは彼女で、朝方まで酒を飲んでわたしに絡んでいたのも彼女だ。エレノディア

命を救ってもらったこの身だが、まさかあそこまでエレノディアの酒癖が悪いとは思わなかった。もう金輪際エレノディアには酒を飲まさないようになろう。

「しかし少し寝すぎたな」

できれば今日中にはこの街の隣にある商業国家ビハインドに行きたいと思っていたのだが、この時間から街を出ても着くのは夜になるだろう。路銀もあと少ししかないから馬車を借りて行くわけにもいかないしどうしたものか。

「とりあずエレノディアを探すのが先か……」

完結に言うところのエレノディアはすぐに見つかった。二階から一階の降りたところでエレノディアは昨日仲良くなったであろう飲み比べをしていた大男とその連れであるわたしと一緒に苦労したのである男性と一緒に談話していた。

「へえ、お兄さんたち商人なんだね。なに売ってるの？」

「ああ僕たちはね」

「俺たちは武器商なんだぜっ！剣から斧や弓に槍。多種多様の武器がてんこ盛り、なんでも御座れと言ったところだ」

「いちいち僕のセリフをとるのはやめてくれないかいバル？」

「そんな湿気たこと言っなよ相棒っ！」

ばしばしと男性の背中を叩きながらバルと呼ばれた大男はがはがはと笑う。その片手には昨日と同じくエールが注がれたジョッキがつ。

さすがのわたしも朝から酒盛りをしているとは思ひもなかった。机の上に他にジョッキがないことからエレノディアは飲んでないようで、少し安心。ホッとため息が出た。

「痛い！痛いからバルっ！？」

背中を叩かれながら男はあまりにも痛さに大男に訴え、そして階段の踊り場にいるわたしの存在に気付いた。

「おはよう。よく眠れたかな？」

「そうだな。ぐっすりとはいかなかったが、それなりには眠れたよ」

「おはようリアー。今日の予定どうしよっか？」

「おう。金髪の嬢ちゃんずいぶん遅い寝覚めだなっ」

それはあなたたちのせいだろうとわたしにとっては叫びたいところだが、なぜだか昨日酒を飲んで騒いでた二人組はなぜかわたしより先に起きてるし、大男の隣にいる男もわたしと寝る時間はさして変わらなかったというのにわたしより比較早く起きてる。

なぜかわたし一人だけ置いて行かれたような気分になるのは間違っていないような気がする。

「髪が跳ねてるぞエレノディア」

「あー、寝癖治すの忘れてた」

てへつとでも擬音が出てきてしまそうになるほどエレノディアはバツが悪そうに舌をちよろつと出した後、アホ毛のようにクルンと刎ねた髪の処理にかかった。

「あと今日の予定だがビハインドに向かうつもりだったのだが……」

「ん？なんか間が悪いね。なにかよくないことでもあった？」

「この時間帯から出たところで着くのは夜になるだろうな……」

ああーとエレノディアは唸りながら、今だ寝癖の処理に夢中になっている。どうやら意外とアホ毛はしぶといようで、いくら手櫛で治したところで復活するようだ。

「じゃあもう一泊？」

「昨日と同じことになっていいならわたしは止めんが？」

「んーそれだったらまだここでもう一泊するほうがマシかも……」

そつだろつな。あんなことを続けていたらその内覚えもない罪状を告げられて捕まってしまうそうだからな。

「話は聞かせてもらつたよ」

「ん？相棒よ。もしかしてこの二人を乗せるのか？」

「そつだよバル。旅は道連れっていうじゃない。たつた一つの街までだけでも人数が増えるのも悪くないと思うけど？」

「待て。話がみえん」

そついうわたしに男は微笑みながらこう言った。

「だから一緒に馬車に乗らないか？」

「そついえばお互い自己紹介がまだだつたね？僕はイーリヤしがない武器商さ、イーリヤって呼んでくれて構わないよ」

「俺はバルビレドだ。相棒と同じく武器商だ。バルって呼んでくれ
っ」

「イーリヤって……まるで女の名前みたいだね？」

「よく言われるよ……」

四人と馬車を操る操縦士。リリアスとエレノディア。そして今紹介されたイーリヤとバルとで彼女たちはビハインド行きの馬車に乗っていた。馬車の中は武器商である彼らの荷物が積み込まれてしまい、なんとカリリアスとエレノディアが乗るスペース分はあり、彼女たちは彼らの申し出に甘んじることで酒場での話は終わり、今は馬車の中。

「しかし自己紹介すらすんでないというのにわたしたちを馬車に乗
せるとは……」

「おうよっ。相棒はかなりのお人好しだからな！困ってる女なんて
見たらイチコロだぜっ！」

立派に真っ白に輝く健康的な歯を見せながら笑うバルに、イーリヤは苦笑しながらリリアスたちを見る。そこには打算などもなく、別段と彼女たちを利用するために乗せたわけでもない。なぜかそう言いきれてしまうほどの人の良さそうな笑いと瞳があった。

「感謝する、本当に助かった。あのまま泊まり続けるのもどうかと
思っていたからな」

「そうだねー。リアは早く帰らないといけないからね？」

今度はエレノディアの言葉にリリアスが苦笑する番だった。今頃帝国の王宮はどうなってるのだろうか？やはり帝国国王であるリリアスの父がリリアスの身を心配して暴れまわってるのではないかと思う。そんなことを考えてしまうと宰相には悪いが苦笑いしか出ないリリアス。

「服装と、服に使われた素材から見て予想はついたけどリリアスさんはどこかの貴族なのかな？」

「しっかしよう相棒。だったらリリアス嬢ちゃんになぜ護衛がいないんだ？服もボロボロだしよ。そこんとこどうなんだ嬢ちゃんたち」

「それは……」

「あーそれはねー。リアったら護衛もろとも野党に襲われたんだ。護衛の人達に逃げさしてもらって、一人困ってるところを旅人であるわたしが見つけたわけ」

「なんと……」

驚いたように固まるバル。イリヤはそんなリリアスに同情の視線を向けながら、でもどこしかたないと納得したような表情で告げる。

「貴族は金回りがいいからね。貴族が持っている物は売れば高値が付くし、人質にでもとればそれだけで貴族から金を回すこともできる。確かに護衛とかがいて野党や盗賊たちにとっては手が出しづらい相手だけど、それでも狙われないってわけじゃないからね」

「まったくもっていけ好かんやつらだ。物を盗んで生業とするやつ

らは我ら商人にとつても天敵だからな」

首を捻りながら続けて言うバル。今彼の頭の中にはリリアスを襲った野党たちのことが考えられているのである。正直言つて彼のよくな大男から天敵という言葉が出てこようともリリアスたちにとつては別にそうでもないと言答してしまいたいが、もしかしたからバルは別に武芸が長けてるわけでもないのかもしれない。あんなりだが商人というのだ。どこに武器を持って戦う商人がいるのだろうか。

「だが安心せいつ。ここには俺もいる、相棒もいる。例えやつらがここを襲つたとしても嬢ちゃんたちには手を出させたりはせんよ」

そう言つてバルはまたがはと豪快に笑い。イリヤも同様、リリアスたちに微笑みながらいた。

「ありがとう。だが馬車に乗せもらつてまでいるのだ。もしそんな時があればわたしも戦うよ」

だがそこまで甘んじるのはリリアスとしては良しとしない。彼女ならではの性格だろう。エレノディアなら護ってくれるのら護つてちようだいとでも言いそうだが、リリアスは王女ながら剣を握るものだ。彼女の父同様戦う者だ。護られてばかりで示しがない。

「遠慮しなくてもいいよ。貴族の人に慣れない武器を持たすのもあれだしね」

「そうだぜ嬢ちゃん。言い方は悪いが足手纏いにでもなられたらこっちが困るからなつ」

「むっ。わたしが足手纏いと言っか……。だが」

「はいはい。落ち着いてねリアー。あなたはまだあんまり回復してないんだから戦うなんて論外だよ？」

「だがっ！」

先日受けた魔術師の雷撃の痺れもすっかりとリリアスの身体からは抜けている。受けたダメージといえばそれぐらいのようなものであとは対したものではない。少しの掠り傷などばかりだ。

「リアが思ってるほどリアの身体は傷ついてるよ。今は気付いてないだけ……。動けば自ずと気付くから」

「エレノディア……。わかった。あなたがそう言うなら」

「おうおうエレノディア嬢ちゃんに対してはずいぶん聞きわけがいじやねえかリリアス嬢ちゃん」

「エレノディアはわたしの恩人だからな……」

「まあそうそう襲ってはこんよ」

「そうだねバル」

だが世界っていうものはいつと突然と理不尽でできてるものだ。リリアスやエレノディアにとって不幸だったのは彼女たちがこの馬車に乗ったことであろっ。この“武器”を運ぶ馬車に。

「イーリヤ様！バルビレド様っ！」

馬車の外で馬たちを操る操縦士が声を荒げる。その切羽詰まったような声に二人は嫌な予感しかしていなかった。

「盗賊ですっ！盗賊団がこの馬車を狙ってきました！」

「おいおい……どうする相棒？」

「まさか彼らはこの情報を仕入れていたというのか……。だったらまずい！せっかくビハインドの王城に献上する武器だと言うのに、盗られてはたまったものじゃないっ！」

イリヤが何を言っていたかは声が小さくてバルにすら聞こえてなかったが、その醸し出す雰囲気からどうにもかなりやばい状況であることはリリアスにはわかった。エレノディアは我関せずと言った表情でリリアスの隣に座っている。

「規模と状況は！」

「すでに囲まれています！数は五十は超えるかと……」

絶望しているであろう操縦士の顔が浮かぶ。正直言葉だけではそこまでの危機感とは与えられない。見て初めて理解できるのだから。そ

の分今まさに見てる操縦士はかなり顔を真っ青に変えてるだろう。今にでも手綱を離して逃げたいほどに。

「っで、どうするよ相棒？」

「囲まれているのだっただらこのまま走り続けても無駄だろう。止めたとしても盗賊たちに袋叩きに合うだけ……。良い策が思いつかない」

「いつも通りでいいじゃねえか？」

「ダメだ。今は彼女たちも一緒なんだ。むぎむぎ危険にさらすわけにもいかない。それにさすがに五十は僕たち二人でも少し手に余る……」

相談するイリヤとバル。どうやらこの状況は彼らにとってもかなりの問題らしい。先ほどまでは意気揚々と言っていたのに、流石に五十という数はそれほど脅威なのだろう。しかも足手纏いを二人連れた今なら尚更といった感じだ。

「……どうにかできないのかエレノディア」

「んーそだね。ちょっと難しいかな？ここの近くに森はないし」

森の精霊とまで言われているエルフは森の中でこそ力を一番に発揮できる。エレノディアに関してはそんなわけではないのだが、彼女はリリアスに自身の正体を教える気はない。知られてしまえばエレノディアはリリアスを殺さなくていけなくなるからだ。魔王と呼ばれるこの身。魔女と呼ばれ忌み嫌われたこの身。幾多の国々を滅ぼした破滅の魔女はいてはいけないのだ。

多少の力は貸すことができるが多少は多少だ。そこまで力を貸せるわけではない。だがそう言ってる場合でもないのもまた事実。

響く轟音。焼ける馬車。馬車の外からは幾多の人による喧騒。そして操縦士甲高い悲鳴。

「くそ！魔術師か！？」

誰かがそう言った。馬車の足はもう止まり始めている。怯えた馬を操縦士が統一することもできず、いやもしかしたらすでに操縦士はいないのかもしれない。

「盗賊に魔術師って、どうするよ相棒？このままじゃまずいぜ」

事態の深刻さを理解しているのだろうバルは今だ深く考え込んでるイリヤに言う。ただの盗賊団に間樹脂などいない。魔術師というものは目先の利益を追求するものである。なんの目的もなしに彼らは盗賊たちと一緒にいたりはいしない。つまりこれは元から狙われた行為で在る可能性が高い。

「……ダメだ。ここで戦っても僕たちはなぶり殺しにされるだけだ。せめてどこか相手を錯乱できるような場所じゃないと！」

「っていつてもここら辺にそんなものがねえのは相棒が一番わかってんだろうがっ！つべこべ言う前に俺たちは嬢ちゃんたちを護らないかんだろ！！」

絶望しきったイリヤに突っかかるようにバルは彼の襟足を両手で持ち上げる。バルのような大男にかかれば、その力の大きさも加わっ

て彼より背の高さも低いイリヤでは軽々と持ち上げられてしまう。

「悩んでる暇があれば槌を持って！戦うべき場なら剣を持ってっ！物は売っても心は売るな！我らは誰にも屈さぬ、我らはただの商人ではあらず！それが俺とお前と親方の武器商としての理念だろうがっ！もう忘れたのか？！ぐだぐだと弱音吐いてる暇があるならやることがあるだろうがっ！」

「だけど！……今は僕とバルだけじゃないんだよ。リリアスさんもエレノディアちゃんもいる……なにかあつてからでは遅いんだ！それぐらいわかつてよ！！」

焼ける馬車の中で怒鳴り散らかす二人。イリヤのほうは襟が少し首をしめてるのか息遣いが少し荒い。だが比べてバルは普段の陽気そうな気配を垣間見せず、続けていく。

「ああそうだな。相棒が言うことももつともだ……だが、俺は考えるのは苦手だ。ただ槌を振って、剣を握って斬ることしか能のない男だ。だったら俺にはやるのが一つしかねえんだよ。このまま追い込まれていくのを黙ってみてるのは俺じゃねえ、このまま黙ってやられてるのをみてるのも俺じゃねえっ！それは相棒が一番わかつてるよなあ？！」

放り捨てるようにイリヤの襟首から手を離れたバルはそのまま馬車の奥へと脚を進める。積んであった荷物から黒く薄汚れた包帯で全体を巻かれた大男のバルですら凌駕する大きさを誇るなにかを取り出した。

「だから行くぜえ？なに魔術師も盗賊も俺の敵なんぞではないさ」

どこか意味気のありそうな笑みを見せながらバルはがはがとひとしきり笑った後、ずいぶんと速度が落ちたとはいえ、今だ走る馬車から飛び降りた。

「待てバルっ!？」

「くどいぞイリヤ殿。わたしも行かせてもらう」

続いてリリアスが左腰に掲げた剣を右手で握りながら飛び降りた。残ったのはエレノディアとイリヤの二人。馬車はまだ走る。

2

「なんだリリアス嬢ちゃんも来たのか？」

「せいえっ 請謁ながらわたしも手伝わせてもらうぞバルビレド殿。なに足手纏いにはならない」

黒く薄汚れた包帯で全体を隠すなにかを肩で掲げながらバルは続いて飛び降りてきたリリアスに内心驚いていた。馬車内でこそ一緒に戦うとは言っていたが、彼女は貴族なはずである。まだ貴族かどうかはつきりしていないとこなのだが、身分が高いということはすでもうリリアスの口から確認ずみで身分が高いというのなら貴族以外にいったい何があるというのだ。位の高い騎士は権力が位の高い貴族と同等になるとは聞いたことはあったが今だ少女と言っても

いいそんな彼女がそこまでの騎士であるわけがない。

「……つま、いいぜ。多分半数は馬車を追っただろうが、そこはイリヤがなんとかするだろうな」

彼らの目の前に広がるのはすでに勝ち誇ったような笑みを浮かべて剣や弓を構える盗賊たち。乗っていた馬からはすでに身体を下して狙いを二人に定めていた。

「剣に弓か……魔術師は馬車のほうに向かったと考えるべきか」

盗賊が持つ武器は剣と弓のみ。魔術師の基本装備は杖か指輪であるために、この盗賊のなかに魔法剣士でもないかぎりそうなるだろう。何人いたかは不明だがもし魔術師が馬車のほうへ向かったのならイリヤたちが危ないだろう。

「まあエレノディアがいるから対して問題はないか」

「ん？エレノディア嬢ちゃんは魔術師なのか？」

「いや、そうではないが。まあ大丈夫だろう」

あの日。雷撃の魔術からリリアスを救ったのは間違いなくエレノディアなのだから。

「てめえらあああ！！！！よおおおおく聞けえええええつ！！！！女は頭から好きにしていると言われた。だったら俺ら盗賊、やることは一つだよなああつ！！！！」

「奪って殺して犯しつくすっ！これ盗賊の基本だぜえええ！？」

盗賊の誰かが言った。その声は広範囲にまで響き渡り、盗賊たちの本能を刺激する。これから彼らは奪って、殺して、そして。

「なるほどわたしも物扱いというわけか……下種めがっ」

盗賊の言い草にこめかみに青筋を浮かばせながらリリアスが激昂する。隣で静かに盗賊たちの様子を見てたバルはおお、怖い怖いとちやかしながら肩に背負っていたなにかを振り下ろした。

刹那、轟く轟音。盛り上がった土。

衝撃で千切れた包帯の中から覗いたそれは銀色に光っていた。

3

「っで、どうするのイリヤさん？」

「どうするもなにも……僕にはどうにもできない。できるのは逃げるだけだ」

すでに馬車は止まり始めていた。誰も馬を動かす人がいないのだ。馬はなにもかもわからず、ただ脚を止めるのみ。

「だったら逃げるべきじゃない？」

「できないよ。ここに置いてある物は盗られるわけにはいかないんだ……」

「だったらどうするのよ……」

正直言つてエレノディアはため息が吐きたくて堪らなかった。バルの口ぶりから聞けばイリヤもそこそこできるのだろうがまったくもって戦うそぶりを見せはしない。だったら逃げるのかと問えば、荷物が大事だという始末。これなら先に降りたバルとリリアスを追ったほうがマシであったとエレノディアは心内でため息を吐いた。だが、今のこの状況でイリヤ一人を置いてくわけもいかず。

「エレノディアちゃんは逃げるといいよ。僕は一人残る……」

申し訳なさそうに笑うイリヤの顔が無償に腹がたったのも事実。

「そうだね。ここにいても危ないだけだもの」

最初に旅人とエレノディアは名乗ったにも関わらず彼らはまったくもってエレノディアに協力を求めてこようとはしない。やはりこの少女の見た目が悪いのだろうかと一人愚痴る。このご時世一人で旅人など危ないだけというのに今だ生きてるエレノディアを不思議に思ったりはしないのだろうか。

それともバルが言った通りのお人好しであるイリヤは女であるエレノディアに危ないことをしてほしくないのかもしれない。それなのだったら検討違いも甚だしいとこだ。

「ま、そう言つてももう遅いんだけどね……」

焼けて少し炭になった馬車の壁を蹴って壊す。穴のあいた場じゃから外を覗けばそこにはずらりと馬車を取り囲む集団たち。

「すでに囲まれていたか……。だったら」

バル同様馬車の奥に置いてある荷物からイリヤの見た目から対して二倍の大きさはあるだろう大剣を担ぎ出してきた。さすがにそれはエレノディアも驚いた。

「なんとかして突破口を開くよ。エレノディアちゃんはその隙に逃げてくれ」

「いやだ」

「つてええ!!?」

身の丈以上の大剣を担ぎながら驚愕に目を開けるイリヤの様はエレノディアから見ればかなり滑稽だった。クスクスと笑いながらエレノディアは右腕をイリヤに向ける。どういう意図を持って向けられたのかわからないイリヤは疑問符を浮かべながらエレノディアを見た。

「リアが心配だからね。とっさに出て行っちゃったから止められなかったけど、リアを置いて逃げるわけにはいかないよ。それにイリヤ一人を置いて逃げるのもあれだしね?」

「だけどっ!」

ずいっとイリヤの口まで持ち上げられたエレノディアの手が彼の口

を塞ぐ。そしてイリヤが黙ったのを見届けると手を口から離して人差し指を口に押しつけた。

「年下が何言ってるの。お姉さんを少しは頼りなさい？」

ふふんと陽気に鼻を鳴らしながら言うエレノディアだが、どこからどう見ても彼女がお姉さんに見えることは一生ないだろうが、それでもイリヤを黙らすことくらいはできるようだ。

「籠城戦ってあまり好きじゃないんだけどね……」

イリヤの口元から指を離したエレノディアはそう小さく呟きながらトン、と軽く飛んで馬車から下りる。それに反応した盗賊たちは各々が持った武器を抜いたが、それに目もくれずエレノディアは続けた。

「この場合じゃしょうがないよね？」

足下から広がる魔法陣。すぐ背後にある馬車とイリヤをも包み込むように展開された魔法陣。盗賊たちの中にいたであろう魔術師はそれがないか気付いた時にはもう遅い。行動を見せた時にはすでに彼らの前には少女どころか、大地から立ち上った土の壁しか見えなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4630y/>

最強無敵の魔法使いの伝説

2011年12月2日18時29分発行